
夕べの祈りより「四季」

のみのみの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕べの祈りより「四季」

【Nコード】

N5237E

【作者名】

のみのみの

【あらすじ】

不思議な力を使える少女ラン。旅をしながら色々なことに出会い、物語は進んでいく。彼女達は、何に巻き込まれ始めているのか。

プロローグ1

ランは今日で十四になる。もう立派な成人だ。

だが、そんな日であるにも関わらず誰も祝ってくれなかった。それを喜んでやりそうな友達くらい何人もいるのに。

その理由は、誕生日以上に大変な事件が起きてしまったからだ。

それは、このフロウ国の王子、ラベンダ・フロウ王子がこの町にやって来た事だ。噂には何日か前からなっていたが、本当に来るとはランは思ってもいなかった。他の女性達は違ったようだが。

仮にも一国の王子であるから、そう易々と外に出られるはずが無いのだ。が、今朝やって来たかと思うと、急に舞踏会をやると言いだしたらしい。

それを聞いた女性達は黙ってはいない。もしかしたら、あの王子のお近づきに、運が良ければ妻になれるかもしれないのだ。そのせいで、誕生日を祝う事は保留になってしまった。その後の予定もだ。「何で今日なのよ」

ランはそう愚痴りながら、床の上にある熊のぬいぐるみを上げて、落とす。

「まあ、仕方ないわよ。サクラたちも、明日祝ってあげるって言うてたわよ」

そう言われても、ランはまたぬいぐるみを上げて落とした。

「それにさ、ナデシ国の諺に、人間万事塞翁が馬、ってというのがあるの」

「何それ。初めて聞くけど、どういう意味なの」

「悪いことが、逆に良い事の前ぶれなのかも、ってという意味よ」

「ふーん。そう」

ぬいぐるみは中に浮いた状態で止まっていた。

「ところでさ、サザンカは何でそんなに物知りなの」

「こっちだって聞きたい事はあるの。何でランはそんな術が使える

のよ
「よ」

ぬいぐるみが床に落ちた。

「分かんない。それに、これから答えを見つけに行くんでしょ」

「そうだったわね」

サザンカの納得していない様子を無視して、ランは聞き返す。

「そっちはどうなのよ」

「彼氏？」

「違う。博識」

実のところ、ランはサザンカに彼氏がいるか知りたがっていたのだ。が、この時はつい、忘れてしまった。

「私が物知りなのは、毎日一冊本を読むからですよ」

プロローグ 2

その噂を聞いたのはいつの事だっただろうか。もう一ヶ月以上も前だった気がする。だがフロウ国の首都フラウからこの町まで八日しかかかっていないから、たぶん二十日ぐらい前だろう。もし聞かなかったならばこの町に来ることも無かっただろう、と思う。

その噂とは、このボタンという町に魔法使いの少女がいる、というものだった。ちなみにこの町は服の釦の生産で有名だ。それが町名の由来になっているようだ。もちろん、ここで作られた衣服もブランド物だ。

魔法使いなんて本当にいるとは思ってもいないが、僕はその少女に会うために父上の監視下からわざわざ逃れてここまで来たのだ。

だが僕が来たという噂は、すでに町中に広がっていた。

隠す事も無いと思い、せっかくだからこの町一番の広さを誇るボタン講堂で舞踏会を開くことにした。そうすれば向こうからやってくるだろう。

その講堂は町の中心にあり、正円の形をしている。周囲が1000ピンチ　1ピンチは7メートル　もある、田舎町としては大きなものである。

ここは、冬に入ると釦付け大会なる催しをするらしい。町中の女がここに集まり、釦付けの速さを競うのだ。だから広い。

だが今は夏でここはほとんど使われていない。町長にさつき会ってきたが、自由に使って良いそうだ。

舞踏会は今日の午後六時から開かれる。治安はそれ程悪くないという事なので、夜の十一時に終わる予定だ。

さて、あの魔法使いは舞踏会に現れてくれるだろうか。町長に名前や容姿を聞いておくべきだったかもしれない。

まあ、見れば分かるだろう。魔法使いは、黒いマントに黒い尖り帽子と決まっているのだから。

プロローグ3

講堂の周りは、タキシード姿の男達と着飾った女達でごった返していた。

さすがはボタン町である。女性の服は鮮やかで、王宮の舞踏会とどっこいどっこいだろう。

講堂入口は数人の警備員が立っている。時々太陽の位置を確認している。

西の地平線に太陽がくつついた時に、警備員達は扉を開けた。

群集が押し寄せるちよつと前に扉は開け放たれ、二人の警備員だけ中に入り、残りは外で群集に押し流されない位置で待機をしていた。

警備員の一人が愚痴る。

「なんだってこんな時期に王子様が来るわけ」

その隣にいた警備員が返事をする。

「さあな。魔法使いに会いに来た、とか言ってたかな」

「魔法使いって、あのランの事が」

「多分、な。だが、ランは来てないみたいだ」

最初に愚痴った警備員は、勢いの止まらない群集を見渡す。ランらしき人物は確認できなかった。

「たしかに。まあ、ランは来なくて良かったんじゃないか。たしか今日誕生日だったろ」

「ああ、そうだったな。可哀想にな、成人になったっていうのに、その日に王子様が来るなんて」

「ランだったら、王子様を投げ飛ばすだろうな」

「ははは、たしかにやりそうだ」

「まあ、サザンカがいるだろうから、口だけで終わるかもしれんが」

「あれ、サザンカも来てないのか。彼女ぐらいの美貌なら、王子様、一目惚れしてもおかしくは無いんだが」

「王子様はラン狙いだろ。たぶんがっかりするだろうな、来てない
って知ったら」

「ちよつと可哀想だがな。だが、会ったら会ったでもっと大変な事
になりそうだ」

そんな二人のやり取りの間も、講堂に入っていく人は絶えなかつ
た。

プロローグ 4

舞踏会には、色とりどりの服を来た女達、そしてタキシードを着た男達がいる。

僕は入口から一番離れた所に作られた台の上の椅子に座っている。「ほっほっほっ、どうですか、ここボタンの少女達は」

町長が聞いてきた。

僕の隣に置かれた椅子に座っている町長は、白い髪と髭を沢山生やし、細い目で動き回る男女を見つめる。

「まあ、王宮の人よりも、可愛らしいですね。服と容姿が良くあっている」

「そうでありましょう。皆、昨日から準備をしたのですよ」

昨日からという事は、僕が来る前から、しかもたった一日で、あの服を揃えたという事だろうか。

緩やかなワルツが流れている。演奏の方はまあまあだった。

「ところで、町長、この町に魔法使いがいる、と聞いたのですが」

町長の細い目が開かれたように感じたが、しかし変化は見られなかった。

「ほう、あの子の噂がフラウまで届くとは、はっはっはっ、まだまだ世界は狭いですな」

「あの子、とは？」

「名は、なんと申したかな。たしか」

「ラン、ですよ、町長」

後ろから声が掛かった。先ほどから立ったまま、町長と僕の後ろにいる長身の男性だ。

「おお、そうだった。ランじゃったの。ありがとっ、シロツメ」

シロツメと呼ばれた彼は、屈めた体をもとの姿勢に戻す。

「ラン、ですか」

「そうじゃ、ランと申してな。あれは、世に言う魔法とは、ちと違

うの」

「違うのですか？」

「うむ」

この話し方、伯父上に似ている。

「世に言う魔法とは、火を使ったり、まあ何かを出す、ものなのじやが、ランの魔法というのはな、たしかのう、物を動かすことなのじゃ」

そう言って手を使って物を動かす様子を示した。

「それはつまり、空を飛ぶ、あるいは飛べる、という事ですか」

「まあ、わしは見た事が無いが、たぶんできるであろう」

「それで、彼女はどの方なのです」

町長は動き回る人たちを見つめる。

「ほほう、少し待たれよ」

町長は細い目をより細くして、人を見ていた。

「どなたですか」

「うむ、それがの、見えんのじゃ。最近、視力が落ちてきての。さて、シロツメ、この中にランはおるか」

「ごいません、町長」

「そうかの。いないそうじゃ、若いの」

若いのは、と呼ばれるのは初めてだった。まあ、町長と比べると六十歳以上若いのだろう。否定はできない。

「それならば、どこにいらっしやいます、町長」

「そうじゃのう。図書館、かの」

「私がお連れ致しますよう」

シロツメが町長と僕にそう言った。

「よろしく頼むぞよ、シロツメ。では、行ってくるがよい」

「ラベンダ王子、こちらへ」

「分かった」

魔法使いに会いに会えるという喜びをなんとか隠しながら立ち上がり、シロツメに付いて行った。

プロローグ 5

ランを連れて図書室に来たものの、なかなか読みたい本が見つからなかった。

「ねえ、サザンカ、まだ？」

「うん。もうちょっと待って」

早くしたほうが良いのかもしれない。そう思い、手近にあった『物質の原子説』という本を抜き出した。

駆け足でテーブルに戻る。

「何持ってきたの」

「これ」

そうして見せた本に、ランは難しい顔をした。

本をテーブルに置いて、ランの隣に座る。

「何、これ」

私の好きな自然分野ではあるが、物質に原子、いわゆる最小単位があるとは思えなかったため、この手の本はずっと読んでなかったのだ。

「ランには、多分すごく難しい本よ。簡単に言うと、このテーブルを細かく千切っていくともうそれ以上は千切れないものが出てくる、っていう仮説」

ランの頭の上には、疑問符が浮かんでいる、ように見えた。もちろんそんな事は無い。

「逆に考えると、微小の物が集まってこのテーブルができていて、っていう仮説。その微小の物を原子と呼ぶ、らしいわ」

その時、図書館の扉が開かれた。そこからシロツメさんと茶髪の少年が入ってきた。ランも振り向いている。

「あちらでございます、ラベンダ王子」

「おお、そうか」

王子と呼ばれた少年は、こちらにつかつかと歩み寄ってきた。

ランからは、わずかに殺気が感じられた。
テーブルの前で立ち止まる。

「お前がランか」

私を指で指して言う。人を指で指すなんて、しかも間違えるなんて、失礼にも程がある。

だが相手は王子だ。失礼をしてはいけない。

「いえ、私はサザンカです」

私が言い終わる直前、王子は書棚に飛んでいった。
背中をぶつけ、少しだけ呻き声が聞こえてくる。

「ラン、やめた方が」

「そうですね、相手は一国の王子であります。怪我をさせるのは私とシロツメさんの忠告も聞かず、鬼の形相で王子に近寄る。ちなみに鬼とは、ナデシ国の十二支という考え方で丑寅の方角、つまり北東にいるとされる、恐い妖怪である。その国の御伽噺にもよく出て来るそうだ。

「私の、成人の目を、よくも、ぶち壊しにしてくれたわね。しかもサザンカを私と間違えるなんて。絶対に、許さない」

どすの利いた声、とでも形容しようか。だが王子は気にする様子も無く爽やかな顔をランに向けた。

「そんな顔をしていても、可愛いよ、ラン、さん」

ランは左手を軽く振る。たったそれだけで、王子の体は左にすっ飛んでいった。

「サザンカ、帰ろ」

気絶したように見える王子を放っておくわけにもいかないが、ランをこのままにしておくのも危険だ。

「シロツメさん、王子のことをよろしくお願いします」

「かしこまりました」

シロツメさんは王子のほうへ素早く駆け寄っていった。もとからそうするつもりだったのかもしれない。

私はそこから視線を外し、今にも図書室を飛び出しそうなランを

取り押さえに行った。

プロローグ6

これだから、ランは困る。

ちよつとした事で、すぐに怒り出すのだ。

「ラン、止まれー」

振り返った。私の声にはなんとか反応するようだ。

「何？」

「外に出ない方がよいよ」

これは本当だ。舞踏会の会場である講堂とこの図書館は近い。しかも舞踏会に行った女性達のほとんどが、あの王子目当てだ。よつて、今外に出て姿を見られたら大騒ぎになる。

「こつそり見てごらん」

ランが扉に手をかけて、わずかに開け、すぐに閉められた。

「人がいっぱいだよ」

やはり、そうだったか。止まってくれてよかった。

「だから、開けるね」

しかし、ランはそう言うと、扉を開け放した。

講堂の周りにいた女たちがこつちを振り向き、ラン、私、シロツメさん、そして王子を見止めると、次々と駆け寄ってきた。

すっかり失念していた。

ランは悪戯が大好きなのだった。

シロツメさんは王子を抱えて、とてつもない速さで裏口から出て行った。

その後どうなったかは聞いていないが、たぶんあのシロツメさんのことだろう、無事逃げ切れたに違いない。それにあの後、無事に舞踏会が執り行われ、定刻に終わったようだったから。

怒り気味のランは自分の家に戻って、旅の支度をしているだろう。明後日出発だ。

本当は明日だったのだが、王子のせいで一日ずれる事になった。まあ、目的地すら曖昧な旅なのだ。いつ出発しても問題は無いだろうとは思うが。

その目的とは、ランの魔法 当人は否定しているが、魔法と定義しても良いだろう の存在理由を調べる事だ。

自分が成人したらすぐに出発する、とよくランは言っていたものだ。それが明後日に実現のものとなる。

最初は私と二人で行く予定だったのだけど、町長がシロツメさんを同行させてくれると聞いて、お言葉に甘える事にした。シロツメさんがいれば道中は安全だろう。

すでに準備が終わっていた私は、机の上に置いてある『物質の原子説』という本を手取る。

これが読んでみるとなかなか面白い。

たとえば、鉄を精製するときに必要な炭素と、発生する気体を、こう考えれば理解できるそう。鉄をI（オダメキ語でIronの頭文字）という原子の集まり、炭素をC（オダメキ語でCarbonの頭文字）という原子の集まり、あと何かもうひとつの原子Aがあるとすると、最初は分子IAAというものがあって、それを高温高圧下で炭素と合わせる事で、AがIから離れてCにくっつく。そうすると、IとCAというものができる。CAが気体ならば、精製機内の炭素が減っている説明にもなるし、鉄が軽くなった事の説明にもなるわけだ。

原子説は本質を突いているのかもしれない。

そんな事を考えながら、サザン力は眠りについた。

プロローグ7

舞踏会のあつた翌日、私とサクラ、その他にも沢山の友達と一緒に、ランの誕生日お祝いパーティーとお別れ会を開いた。

ランは最初からずっと泣いていた。さすがに十四年間も過ごしてきた場所を離れるのは辛いようだ。

会の最後には、ランはみんな一人一人からプレゼントを貰っていた。

あの子が渡したワンピースは、一ヶ月前から試行錯誤を重ねて作られたものだ。あの子達が渡したカバンは、革で作られている。革は貴重で高価だが、生地屋さんが大幅にまけてくれたから、あの子達にも買えたのだろう。それを繋ぎ合わせてひとつのカバンにする過程は大変だったに違いない。

あんなに一杯貰っていたはずなのに、意外と少なく感じた。皆が気を使ってくれたのかもしれない。

旅に出る当日。

私達三人、ランと私とシロツメさん、は町の北側の出入口にいた。一通り挨拶をすませ、別れを告げる。

「それでは、行ってきます」

「気を付けて行くのじゃよ」

町長がそう言ってくれた。他の人達も、色々と別れの言葉をかけてくれた。

そっちに夢中だったためか、シロツメさんが振り返ったことに気付くのに、時間がかかった。

「シロツメさん、どうしたの」

聞いてみたが、返事はない。私はゆっくりとシロツメさんの目線の先にあるものを確認した。ランも同じ向きを見る。

そこは、町の外側にあたる部分で、だいたい3ピンチはここから

離れているだろうか。

そのくらの場所に、美少年が一人、立っていた。

「ラベンダ王子？」

ランの声だった。いつもよりも声色が低くなっている。

それに気さくに答える王子。

「よ。これからどうしようか迷ったんだ。でも、旅に行くんだっから、僕も一緒に行くよ」

それだけ言っつて、ここに無謀にも近付いてきた。ランは魔法を使う気が満々だったからだ。

しかし、王子は平然と真っ直ぐに歩いて来ていた。何かをランにされた様子がない。

そして近くまで来て何かをランに囁くと、そうして大きな声でこう言った。

「それでは、行きましようか」

プロローグ7（後書き）

やっとプロローグが終わりました。
次からが本編のほうです。

（おまけ）

タイトルは、「歌劇シチリア島の夕べの祈りより バレエ組曲『四季』」を参考にしました。
マイナーな組曲かと思えます。ほとんど演じられる事が無いんだとか。
個人的には好きな曲です。

1：道中にて（前書き）

本編に入りますが、単位が分かりにくいと思いますので一部まとめました。 1ピンチ＝7メートル 1ビーク＝1・3グラム 1口
ート＝約450円

1：道中にて

ある程度舗装された道を、四人は歩いていった。

緑色をした髪と瞳を持つ四人の中では一番小さい少女が先頭を歩き、その隣に黒髪のポニーテイルを下げた長身の青年が歩く。少女の結ばれていない髪は腰の辺りまで伸び、歩く都度に右に左にゆさゆさと揺れている。一步後ろには、青い瞳を持つ茶髪の美少年が、少し後ろを歩きながら必死に絵を描いている美少女に何か話し掛けている。

ここで注意していただきたいが、先頭を歩く少女に美を付けなかったのは、もう一人の少女の方がより美人なだけだからである。

「ねえ、シロツメさん、これからどこに行くの」

「さあ。このまま行くと、明日の正午にはカタバミに着くはずですが」

「そうじゃなくて、もっと先のこと」

「ずっと先の事は、私にも分かりませんよ」

「ランが行きたい所に行けばいいのよ」

後ろからサザンカが声を挟む。

「私の？」

「そうです。ランの旅なのですよ」

「そうシロツメは言った。」

「そう言われても」

「適当に行けばいいんだよ。別に僕はどこに行こうが構わないけど、投げ遣りにそう言うラベンダに対して、ランは疑問を投げかける」

「さつきから気になってたけど、何で王子が付いてくるわけ」
「別にいいと思うんだけど、僕が付いてきても。これでも剣術の腕は確かだから」

「そうじゃなくて。何でわざわざ首都からここまで来た上に、私な

んかに付いてくるのか、ってこと」

「ただの好奇心だよ。魔法使いに」

「違う」

魔法という単語に敏感に反応するランに、ラベンダは驚きつつもすぐに謝る。

「ごめんごめん。君のその術に、興味を持ったんだ。ただそれだけだ。それと、王子って呼ばなくていいよ。ラベンダって呼んでくれないかな」

「それくらいは、別に、良いわよ」

なにか納得のいかない事があつたのか、声が小さくなっていったランであつた。

四人は話す事が無くなったようだ。

沈黙の合間を涼しい風が通り抜け、四人の髪をさらさらと揺らす。歩いているのは青い空の下、土を固めただけの道だ。道を外れると、すぐに高い木の森であるので、上を見上げると空を川が流れているような錯覚に陥るだろう。その木々も風に揺れている。

「できた」

サザンカがそう言うと、近くを歩いていたラベンダが覗き込む。

「それ、僕達？」

「うん。なかなか上手いでしょ」

四人は足を止めてその絵を見た。

粗い紙に書かれたその絵は、三人を後ろから書いた絵だった。黒炭だけで書かれているはずなのに、色が見えてくるようなほど正確に描かれている。

「ほう、なかなかのものですな。さすがはサザンカです。色を付けられるものを探してみるのも良いかもしれませぬ」

シロツメの提案に皆乗り気になった。

「葉っぱとから、緑色。花から赤や黄色。花や葉っぱを乾燥させれば茶色もできる。石を砕けば青や紫が作れるし。後は、紙ね」

サザンカがざっと色の出そうなものを言っていた。

そして、最後に言った紙はこの世界ではとても貴重なものなのだ。絵を描くには無くてはならないが、サザンカはお金にほとんど余裕が無かったのだ。今までは石や黒板に書くことが多かったが、今日は友達から貰った紙に何かを描こうと思ったのだ。

「あ、それなら問題ない。僕がお金を払うよ」

ラベンダはちよつと自慢気にそう言うと、懐から袋を取り出した。

「ここに大体5000ロート　1ロートは約450円　ある」

ロートとはこの辺りの地域で使われる通貨で、これだけあれば十年は普通に生活できるお金である。

続けてラベンダが爆弾発言をした。

「国庫から盗んできました」

啞然とする三人と微笑むラベンダに一陣の強い風が当たり、髪が流されていた。

2：野宿

道から少し離れた場所にあった空き地に、薪を積んでいく。

周りは森だから薪なんてすぐに集まる、なんて思っていた私は、一時間くらいかけてラベンダとシロツメさんが薪を持ってきた時は仰天した。

どうやらこの辺りの森の地面には全く光が当たっていないので、地面に落ちている枝は湿ってしまっていて火を点けられないのだそうだ。

戻ってきた二人はすぐに、更に薪を持ってくるために森の中に戻っていつてしまった。

それからしばらく経つ。もう二時間は経つただろうか。まだ明るいが、陽光は高い木に遮られて地面に当たっていないため、薄暗く感じる。

「ねえサザンカ、火、点けようよ」

少し離れた所にいるサザンカは、読んでいた本から視線を上げた。

「もう少し経つてからのほうが良いわよ。この辺りだと薪は大事に使わないと」

彼女は本を閉じて、こっちに寄って来た。

「それに、こんな細い薪だと、すぐに消えちゃうでしょ。夜が短い時期とは言っても、まだ十二時間は点けていたいわ。それにしても二人とも遅いわね。大丈夫かしら」

「大丈夫でしょ、さつきも帰ってきたんだから」

「まあ、迷いはしないと思うけど。結構視野は開けてるし。だけど、それが逆効果になる事もあるのよね」

「逆効果？」

「そう。まあフロウ国はどちらかと言うと平和な国ね。北は山脈、それ以外の周りを海に囲まれているから。魔物もわざわざここまで来るとは思えないけど、獲物が見つつけやすいから」

「魔物」

「そう。ちなみに、魔物っていうのは」

「知ってるよ、それくらいは。学校で習ったもん。動物の中で特に必要以上の狩りをするもの、でしょ」

「まあ、一般的にはね。でも、定義に関してはこう言う専門家の方が最近が多いわ。高い知能を持った動物のうち、人間に危害を加えるものの総称が魔物だってね。人間に危害を加えないものは、例えば妖精が有名かな。まあでも、その辺は今でも議論が分かれてるのよ」

「えっ。妖精って、架空の生き物じゃないの？」

「本当にいるのよ。ちゃんと科学的資料も揃っているわ。正確には昆虫のうち高知能かつ無害のものを妖精って総称するわね。童話に出てくる妖精は小型の人間に羽が生えたような感じだけど、その元になったのは蝶々の妖精だったかな。その科学用語がいつの間にか童話に出てくるようになって、架空のものとしても使われている、というだけよ」

「知らなかったな」

突然、後ろからラベンダの声がした。

「ラベンダ」

驚いた拍子に、大声を出してしまった。

後ろを振り向くと、笑っているラベンダとシロツメさんがいた。ちよっとむっとする。少し眉にしわが寄ったかもしれない。

「まあ、そうやって落ち込むな」

ラベンダは優しく励ましてくれた。別に、落ち込んではいなかったけど。

よく見ると、薄暗い中に立つラベンダは、とてもかっこよかった。「さあ、今夜分の薪を持ってきましたから、夕食にしましょう」

気を取り直すように、シロツメさんの声を聞いて立ち上がった。

疲れただろう二人に休んでもらって薪にマッチで火を点けると、私とサザンカで簡単な料理をする。

料理と言っても、いつも家で食べるようなものが葉っぱに包まれているだけだったので、すぐに準備が終わった。

焚き火に戻ると、二人は楽しそうに話していた。

「何話してたの？」

私の質問に、シロツメさんが答えてくれた。

「私がランやサザンカに付いてきた理由ですよ」

そんな事かと思いつながら、手に持った二人分の料理をシロツメさんに渡し、隣に座る。

サザンカはラベンダに渡して、私の隣に座った。

「それでは、食べましょうか」

シロツメさんに対してサザンカが言う。

「そうそう、せっかく旅に出たのだから、趣向を凝らしましょうよ。例えば、そうね、ナデシ国では、食事をする前に、いただきます、と言うそうよ」

「いただきます？」

私が聞いた。

「そう。この料理を作ってくれた人に、そして、この材料を作ってくれた人に、感謝の気持ちを込めて、いただきます、って言うそうよ」

それぞれ、小声でいただきますと言っている。

「悪くないな。長すぎないのがいい。それにしよう」

ラベンダの声に、私達は賛成する。私も食事前の挨拶は長いと思っていたのだ。

「それでは、食べましょう」

さっきと同じように言ったシロツメさんの言葉に答えるように、言う。

「いただきます」

四人の声が、薄暗い森の中に溶けていった。

夜は段々と深まっていき、食事が終わった頃には真っ暗になった。

焚き火の周りと空だけが明るい。

星空だった。

「これなら、明日は晴れるな。せっかくだから、海に行ってもいいんじゃないか」

ラベンダの提案に、私は胸が躍った。

「確かに、いいかもしれません。ここからなら、歩いても大した距離ではないはずですし、明日の日没前までにはカタバミに着いているでしょう」

シロツメさんの賛同する意見のあと、サザンカの不満そうな声が聞こえた。

「本当に、行くの」

「あっと、サザンカは泳げないのでしたね」

そうだった。私が学校三年生の時にサザンカが転校してきて、その日に水泳の授業があったのだ。そこで溺れそうになっていたサザンカを思い出す。サザンカは勉強ができて運動は全般的に苦手だった。

だが、ここで食い下がっては海で泳ぐ事ができない。

「サザンカは海辺にいればいいのよ。そうすれば大丈夫。泳がなくてもいいんだから」

そう私が言ったものの、サザンカは不満そうだった。

「まあまあ、泳がなくてもいいのですよ。そう長居する事もありませんから」

シロツメさんが微笑みながら言った。

サザンカは渋々といった感じで頷いた。

3：海

海か。最後に行ったのはいつだったか。

基本的に王宮からは出られない生活が続いていた。時々なにかの行事で町に出ることはあっても、さすがにフラウから外に出ることはなかった。

それがどうだろう。今ではランという術師と、サザンカという少女と、シロツメさんという長身の男性と一緒に、普通に旅をしている。

「ラベンダは、何でランに付いて行くんだい」

テーブルの向かいからシロツメさんが声を掛けてくる。

今は、フロウ国西海岸の北部に当たる海岸の浜辺に建っている、ログハウスの中にいる。たぶんどこかの貴族の別荘なのだろう。

「前にも言いましたけど、ただの好奇心ですよ」

「ただの好奇心で、王宮を出られるとは思わないな」

実は、それは僕も気になっていた事だった。

「確かにそうです。誰かが追いかけて来てもおかしくは無いと思います。ですが」

僕は、ここで軽く言葉を切った。

「ですが、僕が言えるのは、僕はただ単にランへの好奇心が掻き立てられた、だけです」

「確か、町長に話していたけれど、王宮でランの事が噂になってた、と言っていたよね」

「ええ、僕はそれで彼女の存在を知りました」

シロツメさんは、そうか、と言ったきりガラスのある窓から外を見て考え込んでしまった。

黒く長い髪をポニーテイルにしているので、顔や体の細さがより際立っている。だがその中身はもっと、否、非常にしっかりしたものだろう。舞踏会を開いた日、シロツメさんに図書館から講堂まで

おぶられていたが、腕の力が只者ではない事がよく分かった。

考え込んでいると扉が開いて、外の潮の匂いが流れ込んできた。

「終わったよ。次は男性陣、どうぞ」

そう言われて、僕とシロツメは外に出た。

私はなんでランに付いて来ているのだろう、と時々思う事がある。もちろん、彼女は私の親友だ。親友だから一緒に付いていく。

だが何かが違うような気がしてならない。もしかしたら、私はランの術にしか興味が無いのではないだろうか。そんな気もする。

「あれ、サザンカ、どうしたの、難しい顔して」

ランにじっと見られていた事に気付いて、少しだけ慌てた。だが顔には出さない。

「なんでもないよ。海は広いなっと思ってただけよ」

「そうそう、本当に広いよね。どこまで続くんだろう」

テューダ海と呼ばれる海でこのフロウ国は三方を囲まれている。

「あの海の間こうには、アカンス国があったかしら」

「アカンス国か。行ってみたいな」

「ランが行きたい所に行くのがいいわよ。皆賛成するでしょ」

「そうだね。それじゃあ目的地は、アカンス国に決定、という事で、どうやって行くの？」

知識は、人伝か本か学校しかないのだから、知らないのも無理は無いだろう。

「それなら、世界地図を書いてあげるよ」

カバンから紙を一枚と黒炭を取り出す。その右半分に一筆でこのプラナ大陸を書く。その右端にいくつかの島を書き、その島の下部にいくらか離して大きな島の島を書く。今度は大陸の左側に小さな島を三つほど書き、そこからいくらか離してオダメキ大陸を描く

読者には、イギリスを中心とした一般的な世界地図を思い浮かべてもらえばよいだろう。

「上が北、下が南。右が東で左が西。それでこの右側のが、今私達がいるプラナ大陸。プラナ大陸は、北西部、南西部、東部の三つに分けられてるわ。通貨単位が違うの。それで、左側のがオダマキ大陸。北部はほとんどオダマキ国で、南部はまだ未開発と言われてるわ。まあ世界地図はこんな感じかな」

「へえ、そんなふうになつてたんだ。私たちはどこにいるの?」

「私たちは、ここ」

そう言つて、北西部と南西部に挟まれた海に突き出ている、細長い半島の北東部　イタリアのヴェネチアより少し南　を指で指した。

「それで、アカンス国は、ここ」

今度は、その海の北東部に接する部分　ギリシア　を指で指す。

「だから、海に沿つて歩いて行くのが一番速いわ」

「何日ぐらいで行けるのかな」

「それは分からないわね。だいたい140キロピンチだから、一日に6キロピンチ歩いたとしても、20日近くかかるわ」

「一日に6キロピンチつて、大変?」

「そうね。例えば、1キロピンチを100分で歩いたとすると、600分、つまり10時間もかかるのよ」

「なんだ。それくらいなら、大丈夫なんじゃない」

「でも、これを一ヶ月も続けるのよ。ラベンダも、45キロピンチが8日掛かつたつて言つてたわ」

そう言つて、首都フラウ　ローマの事　と現在地で指を行つたり来たりさせる。

「45キロピンチで8日掛かつたら、140キロピンチだとだいたい25日も掛かるのよ」

「大変そうだね」

ランが呟いたが、実際に大変なのだ。

私はフラウからボタンまで歩いた事があつたが、安全といわれる

その道ですら魔物が出てきて危険にさらされた事がある。あの時は旅団に剣士の人が数人いたからすぐに進めたのだ。

「でも、アカンスには行く。やってみないと、何が起こるかなんて分からないんだから」

ランは元気良くそう言った。

4：魔物

太陽が真上に来た辺りで、昼食を食べ終わった。

ログハウスの中は風が通っていて、適度に涼しかった。

「それでは、出発しますか。今からなら4時には着くはずですよ」

シロツメさんの落ち着いた言葉を聞くと、こっちまで落ち着いてくる。

実は、アカンス国に行くと言ってしまったって結構慌てていたのだ。体力に自信が無い訳ではないが、140キロピンチと聞いて心配なのは今も変わらない。

今までそんな距離を歩いたことが無いから、というだけでなく、魔物についても気に掛かっていた。

魔物といえば、今までに何度も人間と戦いを起こしている。私でも知っている有名なのが、カラー戦争だろう。

これはカラー国と魔物との間に起こった戦いで、終結までに10年近く掛かったらしい。結局は人間が勝ったが、犠牲になった人は沢山いたそうだ。

魔物は恐い。

私達四人はログハウスから出ると、道へ戻るために森の中を戻り始めた。波の音が後ろから聞こえてくる。

「それにしても、気持ち良かったな」

前にいるラベンダが伸びをしながら言う。腰に刺さっている長い剣が、足を出す都度に揺れているのが見えた。その剣は装飾が綺麗で、高価なものだと分かる。

続けるようにシロツメさんが言う。

「海には病気を治す力があると言われています。アカンス国までは海岸近くを歩く事になると思いますから、時々入るようになるのが良いと思いますよ」

病気を治す力か。町にいた時は、薬草や薬菜を砕いて飲んでいた。

薬は苦かったから、海で泳ぐ方が良いかも。

と、突然ラベンダとシロツメさんが止まる。つられて私とサザンカも立ち止まった。

「どうしたの？」

私の率直な質問に答えたのは、意外にもサザンカだった。

「右側から、カブリサが三匹、近づいてくるわ」

カブリサって何だろう。疑問に感じたが、サザンカに手を引かれて近くの木の根本に座った。

「静かにね」

そう言われて、質問をする事もできずに口を塞がれる。

しばらく何の音もしなかったが、だんだんと何かが近づいてくる気がした。その足音のしない気配に、鳥肌が立つ。

ラベンダは剣を抜いて臨戦状態だった。いつもとは違う目をして
いる。

一方のシロツメさんは、目が笑っているようだった。ほとんど笑わないはずのシロツメさんが、である。その笑顔を見て気持ちが悪くなり、目を逸らした。

私が目を逸らして少し経った時、急に狼のような咆哮が聞こえた。だが狼ではないことは確かである。狼はこの地域にいるはずの無い動物だからだ。

その声に反応するように、あちらこちらから同じ声が出た。いっばいいる。

ラベンダが舌打ちをした、かと思うといつの間にか前に走り出していた。

するとすぐに奇声が聞こえる。あの魔物の断末魔の叫び声のようだった。もう一度同じ声が聞こえ、もう一匹が倒されたことが分かった。

あと一匹、なの？

シロツメさんはあの笑顔のまま私達の右側に走ってくると、突然足で私の死角にあたる部分を蹴った。うめくような声が聞こえる。

続けて、素手でその何か、たぶん魔物、を殴ると、シロツメさんの動きが止まった。

シロツメさんとラベンダが目の前で会話をしているようだった。いつの間にラベンダは動いたのだろう。それに、何を話しているのかが聞き取れない。耳でも悪くなったのだろうか。

「おい、ラン、大丈夫？」

すぐ傍から聞こえてきた声に、びくりとした。すぐに体が震え始める。サザンカの声だと分かったのは、それからしばらく経ってからだった。

震えは止まらずに、サザンカに背中をさすられていた。

5：カタバミ町

それから5分間は震えていたと思う。

サザンカによると、人間の感情は5分経つと消えるのだそうだ。

震えがおさまってから、元の道に出て先を進んだ。

それからカタバミに着くまで、私はずっとサザンカの手を握っていたと思う。このあたりの記憶は曖昧だった。

カタバミ町に着いたのはだいたい5時だった。それから宿に入つて夕食を食べ、その後部屋でカブリサのことを聞いて、何事も無かつたかのようにぐっすりと寝た。

カブリサとは、魔物の一種。サザンカによると、多くの学者は階数というものを魔物につけていて、カブリサは階数1なのだそうだが、階数が低い程知能が低い。さらにまた一部の学者は人間も魔物の一種であるとして、階数10を与えているらしい。人間も魔物なのかな。

カブリサの系統は、狼と同じものと考えられており、発生年数はスパチュラ暦1600年頃、今年は3450年だから1850年前と考えられていて、現在発生年数が確認されている魔物の中では、最古のものだそうだ。カミツレ国 位置はロシアの東半分に相当に住んでいた狼の一種が、突如として高い知能を持ったのだという。

いつの間にか朝になっていたらしく、目を開けると部屋は明るくなっていた。

階下の食堂へ行ってみると、ラベンダが一人で座っていた。

「お、起きたか。おはよう」

「うん、おはよう」

ラベンダの向かいに座る。

「他の二人は？」

「町に行ってるよ。買い出しだとき。朝食は、あの人に言えば作ってくれるから」

「ありがとう」

お礼を言って立ち上がり、カウンターの奥にいる宿の人に話し掛けた。

すぐに作ってくれるそうで、座っていれば持ってきてくれるそう
だ。

ラベンダは何かを読んでいた。

「何読んでるの？」

そう言いながら、さっきの場所に座る。

ラベンダは無言で表紙を見せてくれた。

そこには『料理日誌2』と書かれている。

「お店の人が貸してくれた」

ラベンダが料理をするなんて意外だった。王宮では、専任の料理人がやってくれると聞いている。

「ただの暇潰しの趣味だ」

誤解されないように続けたらしいが、逆効果になる。

「趣味で料理か。女の子みたい」

「あんな、料理人は男が多いんだ。一般家庭だと女が作るらしいが、店だとたいいてい男が作るんだ」

「へえ」

感心していると、料理が運ばれてきた。宿の人は簡単に説明をする。

「それは、この辺りの郷土料理よ」

「私、よく食べてました」

「そうなの。それは良かったわ」

微笑みながら、宿の人は戻っていった。

昨日魔物に襲われたのが夢のようだった。今こうしていつもの食事をしている。それがまるで奇跡のように感じられると、涙が溢れ

てきた。

「おい、どうした？」

「何でもない」

ラベンダは私の涙を見て慌てたようだ。

心配させちゃったな。ランやシロツメさんも同じように心配して
るだろうな。

「私も、頑張るから」

ラベンダは何か言いたげだったが、結局は何も言わなかった。

部屋に戻って休んでいると、扉がノックされた。

「どうぞ」

そう言うのとラベンダが中に入ってきて、近くの椅子に座った。

「何しに来たの？」

「いや、ちよつと考えてることがあつてな」

ラベンダはじつところちを見ていたので少し恥ずかしくなり、窓
をみた。空に白い月が浮かんでいた。

「ランには、強くなつてほしい」

突然そう言われた。私が振り向くと、ラベンダは続けた。

「もしかしたら、僕とシロツメさんだけだと、君達二人を守り切れ
ないかもしれない」

「どうしてなの。昨日はあれ程強かつたのに」

「シロツメさんの目を、見なかつたか？」

目。思い出しただけで、背筋が凍った。

「見たようだな。あれは危険だ。あれは普通の戦い方じゃなかった。
あれは」

ラベンダは躊躇ったが、しかし、しばらくしてから続けた。

「殺しを、楽しんでる」

予想できたはずのことだったが、シロツメさんがそんなことをす
るはずが無い、と思ひ込んでいた。

だが、ラベンダの言葉で、それは事実として理解してしまった。
そんな私の心境を知ってか知らずか、ラベンダは話を変えた。

「それと、早く強くなるのだったら、ランの術が良いと思う」

「術？」

何のことか、すぐに分からない。

「魔法みたいな、ランの術だよ」

「魔法じゃない」

魔法は好きではない。昔の嫌な思い出が思い出される。

「ごめん。まあその術を練習すれば、魔物ぐらいなら自分で倒せるようにするよ」

一度も考えたことがなかった。術を武器にする。

「でも私、魔物を飛ばすことしかできないよ」

「別に、相手を飛ばす必要なんてないだろ。石とかでも、充分怯ませることはできる」

石を飛ばすのか。

「まあランの術がどんなのか詳しくは分からないけど、沢山飛ばせるようになるよ、こっちの援護もできるからな」

みんなの役に立てるのか。

「まあ術だけじゃなくて、精神の方も強くないとな」

そう言つと、ラベンダは部屋をあとにした。

「練習、か」

そう呟き、テーブルの上にある二つのカバンを持ち上げてみる。
だが、どちらか一方しか持ち上がらなかった。

6：出発まで

私達が宿に戻ってくると、すでに昼食の時間だった。

朝食もそうだったが、昼食もこの辺りの、私やランやシロツメさんがよく食べていたような郷土料理が出てくる。

ランは食べ終わるとすぐに部屋に行ってしまった。

私は残ったラベンダやシロツメさんとしばらく談笑してから部屋に戻った。

部屋では、ランがカバンを上げていた。

「何をやってるの？」

愚かな質問だと、言ってから気付いた。見れば解る。

ランが顔を上げて答える。

「練習中。二つの物を上げられるように」

そう言いながら、テーブルの上に二つのカバンを置いて、それを術で上げている。

片方は簡単に上げられるようだったが、もう片方で苦戦していた。そういえば、ボタンから旅立つ時、ラベンダがランに何かやったような気がしたのよね。

「ねえ、ラン。ちよつといい？」

「うん、いいよ」

ランは術を止め、こつちを向いた。

「一つ聞きたいんだけどさ、ボタンを出るとき、ラベンダに何か囁かれていたわよね」

ランは首を縦に振る。

「それで、なんて言われたの？」

「一ヶ所だけを動かそうとしても効かないよ、だってさ」

「それだけ？」

「うん」

一ヶ所だけを動かそうとしても効かない、か。

まず、一ヶ所という言葉から、ランの術はある点に対してだけ力が働いているということ。そして、それはランの思考が引き起こしていることも文脈から推測できる。

それをたった二回、それも突然やられたにもかかわらず、そこまですべて観察しているとは、さすがだ。

もしラベンダの想定が正しいとするならば、二つの物を動かすのなんて簡単な事だ。

「ねえラン、二つ同時に持ち上げてごらん」

「二つ、一緒？」

「そう。二つを一緒に動かすの。そういう風に、考えてみて」

「わかった。やってみるね」

ランは軽く両手を前に出すと、目を閉じた。

しばらくすると、二つのカバンが同時に上がりはじめた。

「上がった」

ランはそう呟いた。簡単にできて驚いたような感じた。

「何で？」

私に聞かれてもちょっと困る。ラン自身の方が分かっているはずだけど。

「ランは分からないの？」

「うん。分からないから、聞いているの」

私は説明を始める。

「まず、今までのランは、術を使うときある一点だけに集中していたの。それで、二つを持ち上げようとすると、どちらか一つしか集中していないから、もう一方は落ちたの。私は、二点を想像するように言った。だから二点ともに集中できたのだと思うわ」

「絵を描いている感じ、だったな」

突然、ランが話し出す。

「なんて言うんだらう。頭の中に描いた通りに、物が動いて、くれた、のかな」

くれた、という所を強調した。

「勝手に動いてくれたの。動かそうとするんじゃないで、動くんだって思ったらできた」

嬉しそうに言うラン。

「所で、なんでランはその練習をしたの？」

「ラベンダが、強くなりたいたいならこの練習をしろ、って言ったから彼が、か。まあボタンを出した時点でいつかはこうなることは分かっていた。ラベンダがいてもいなくても、だ。

ただ、あまり攻撃に使ってほしくないと思う。

昨日カブリサに襲われたが、本当は殺してほしくはなかった。魔物も生きている動物だから。

それに、最初に攻撃するのは、いつも人間の方なのだ。

翌日、朝の早い時間に朝食を食べて宿を出発し、町の中で食料を調達する。

基本的には、日持ちのする、乾燥させた物等を買う。

ちなみに私が読む本は昨日の内に買っておいた。読んでしまった本は売ってしまう事で持ち物を増やさないようにしている。もちろん図書館の本は、持ってきたり、ましてや売ろうとはしていない。

ある程度必要な物が揃ったので、適当な食堂で昼食を摂ることになった。

「気になってることがあるんだけど、聞いてもいいか、ラン」

食事を食べながら、ラベンダが聞く。

「いいけど、何？」

「ランは、空を飛べるのか？」

シロツメさんが噴出しそうになる。顔には全く出ていないが、喉がぴくりと動いたのが分かった。

「うん、一応。ずっと前に、真似をして、箒に乗って飛んだ事がある」

ランは魔法使いとは直接言わないで、言外にただよわす。魔法という言葉は、私と会話してもほとんど言わないのだ。

「そうか。それなら薪を集めるのが楽できるな、シロツメさん」

「ええ、そうですね。でもわざわざ飛んで取りに行かなくても、ランに術で遠隔的に取ってもらえばいいのですよ」

「あ、そうか」

ラベンダは飛ばなくてもいい事に気付いていなかったようだ。

「そんなに勝手に決めないでよ。枝を折るのつて、大変なんだから」
ランは頬を膨らましているが、ラベンダは微笑みながら言い返す。
「まあまあ、練習だと思って、やっておくべきだよ。それに重い物も持ち上げられるようになるしね。ラン、今はどれくらいの重さまで持ち上げられる？」

「だいたい60キロビーク　1ビークは約1・3グラム　くらい。大人の男性なら持ち上げられる」

「でも、ほとんどの魔物は持ち上げられないな。奴らは100キロビークが標準だからな」

店の店員がこつちを怪訝に見ている事に気付きラベンダに声を掛けると、その話はまた後でする事になった。

7：練習

カタバミ町を出発してから数日が過ぎた。

まだ次の町まではしばらく掛かるようで、野宿をする度に私が薪を取らなければならなかった。といっても強制的にやらされていたわけではない。自主的だ。

そして、今日も薄暗くなってきた所で、枝を折りに行った。

私達が夜に休む場所は、道から少しだけ外れた所にある空き地だ。正規の道の近くには何箇所もこういう場所があり、ほとんどの場所には以前にも焚き火をしていた形跡があった。

今日休む場所はいつもよりも広かった。私の町の講堂くらいはある。サザンカ達はその真中より少し道寄りの倒木が四角く並んだ所で野宿の準備をしていた。

私は空き地の端まで来て、三本の枝が折れる想像と、それに併せるような力の動きを見出す。

そういえばサザンカがよく分からない事を言っていたな。ベクトルなんかかかんとか。よく分からなかったが、なんだかどうでも良い事らしいので深くは考えないでおこう。

力が見出せたら、それを想像通りに出す。

すると、想像通り三本の枝が折れた。

枝は宙に浮かしたまま近くまで持ってきて、脇に溜める事になっている。

そのような事を何回か繰り返して、大分枝が溜まってきた時だった。前の方から何かがやってきた。一瞬、魔物かと思ったが殺気が全く感じられないので違うと私でも分かった。

その何かは、真直ぐに私に向かってくる。

イノシシだ。

魔物ではなかった。

そう思うと、ホッと気が抜けてしまった。

だが、イノシシは猛烈な速さで私に向かってくる。あれはまさに、サザンカに言わせればナデシ語で猪突猛進、と言うのだろう。

突然、足から頭にかけて震えが走っていった。このままでは、ぶつかるとい。

今更ながら、逃げようと思った。だが恐怖か何かで足が動かさな

い。ラベンダに精神も強くなれって言われたのにな。

ラベンダ達は殺気が感じられない為か、私の危機に気付く様子が無いようだった。

どうにかしなきゃ。

イノシシはどんどん迫ってくる。

術を使おうと思ったが、頭が真白で想像する事ができない。以前は想像しなくても良かったんだけどな。新しい方法にすると一々考えないといけなくなる。

ああもう、一々考えてるから、近くまで来ちゃったな。当たるな。痛いな。

妙に落ち着いてしまい、体から力が抜けていく。まあ、力を抜いておいた方が大怪我にならないから、これで良いのだ。と開き直してみる。

ぼうつとイノシシを眺めていると、突然横に吹っ飛んだ。

イノシシが横っ飛びをするものだろうか。

そんな事を考えていると突然、前から声がした。

「大丈夫だったかい」

いつの間にか私の前に立っていたのは、紫色の髪が魅力的な女性だった。

私を助けてくれたその女性は、^{すみれ}董と名乗った。弓師だそうだ。

彼女ともう一人、^{おおいぬ}大犬と名乗った男が一緒だった。

二人とも、ナデシ国出身だそうだ。

「よくナデシ国からフロウ国までやってきましたね」

シロツメが言う。それに答えたのは、大犬さんだった。

「まあな。だが、もう何年も旅をしているから慣れちまった」

名前通りの大柄な体を大きく揺すらせて、盛大に笑う。

続けて董さんの威勢の良い声が森に響く。

「それに、あたい達は旅商人だからな。旅が命なのさ。あんた達、何か買うかい？」

そう言って、荷物を広げ始めた。

大犬さんの荷物の中から出てきたのは、様々な武器。董さんの荷物の中から出てきたのは、様々な薬草だった。

「本物だ」

「凄いな」

サザンカとラベンダが感嘆する。

「詳しくそうだな。一つ一つ触ってみてもいいぞ」

董さんにそう言われたサザンカは、近くにしゃがみこんだ。

ラベンダもいつの間にか、大犬さんから説明を受けている。

残された私とシロツメさんは、商品に見入る二人が満足するまで近くに座って黙っていた。

8：六人で

大犬さんに見せてもらった武器の数々は、僕が初めて見る物も多く、使い方さえ分からないものもあった。

見せてもらった後、董さんと大犬さんと一緒に夕食を食べることとなった。

二人とも気さくな人で、会話は絶えることが無かった。

食事が終わったあたりで、シロツメさんが大犬さんに聞いた。

「一つ聞いてもいいでしょうか」

「シロツメさん、そんなに改まらなくてもいいぜ。寒気がする」

「すみませんね。こういう喋り方しかできないもので」

「まあいいさ。んで、なんだ」

「これから、どちらに向かわれるのでしょうか」

シロツメさんの言葉が、いつに無く改まっている。僕も寒気がしてきた。

「どこだったか。なんだか、言いにくい名前だったな。ヒナガンバ、だっただけか？」

大犬さんに代わって、董さんが答える。

「ヒナंगाバ国　位置はインドに相当　だろ。それくらい覚えとけ。これからあたい達は香辛料を取引に行くから、そこまで行くのが色々と便利だな」

たしか、ヒナंगाバ国はプラナ大陸の東地域の交易中心国だ。特産品は胡麻・茶葉・糸。

「それだったら、私達もアカンス国に行った後、ヒナंगाバまで行くよ」

明るい声で言ったのはランだった。まあ、僕は反対する理由が無いのでこう言った。

「まあ、良いんじゃないのか。ランが行きたいのなら、な」

サザンカやシロツメさんも同意する。それを見ていた董さんが提

案をする。

「そんなら、あたい達と一緒に行くか」

「うん。そうしましょう」

ランの同意により、以後六人で旅をする事になった。

シロツメさんの無表情はいつもの通りだったが、隣にいるサザンカがその顔を見て一瞬戸惑ったように感じた。

この後僕は、ランが董さんの持っていたリユートを弾きながら、それに合わせてサザンカが歌を歌う所を、驚きながら聞くこととなった。王宮にいる演奏家よりも上手い、とさえ思えるほどの腕前だったのだ。

9：詩

無題

作詞・作曲者不明

きのうのことのように
あのとかが思いだされる
悲しかったあのと
誰が悪かったのだろう

疑問は疑問をよび
疑惑は疑惑をよび
疑心は疑心をよび
はじめを誰もしらなくなる

あしたはどうなるだろう
誰にもとめられない
やめる理由がない
誰にもおわりがない

きのうのことのように
あのとかが思いだされる
楽しかったあのと
誰が変わったのだろう

至福は至福をよび
魅惑は魅惑をよび

恋心をもった日
はじめは誰もわすれない

あしたはどうなるだろう
誰でもとめたくない
やめる理由がない
誰もがおわらせない

きのうのこのように
あのとかが思いだされる
淋しかったあのと
誰が守ったのだろう

空虚は空虚をよぶ
迷惑をかけたひと
幼心に思う
はじめに誰かがわかったと

あしたはどうなるだろう
誰かがとめない
やめる理由がない
誰かがおわらせないと

きのうのこのように
あのとかが思いだされる
恐かったあのと
誰が間違ったのだろう

波紋は波紋をよび
憎悪は憎悪をよび

野心がはびこっている
はじめは誰が悪かったか

あしたはどうなるだろう
誰かをとめられる
やめる理由がない
誰しもおわれない

きのうのこのように
あつときが思いだされる
嬉しかったあつとき
誰が始めたのだろう

幸福は幸福をよび
歓喜は歓喜をよび
自信は自信をよび
はじめを誰かがはじめる

あしたはどうなるのだろう
誰がとめたのか
やめる理由がない
誰がおわつたのか

10：夜の会話

寝静まった夜中、二人の会話が囁かれる。

ねえシロツメさん、あの二人、怪しくない？

そうだね。イノシシが出てきたのは不自然だったけど。

それに、私フラウで、あの二人が商売をやっているのを見たのよ。もう何年も前だよ。

そうなんだけど、王宮にも入っていつていたわよ。何かラベンダのことで、

止めなさい、物騒なことを考えるのは。二人はラベンダに何かをしたわけではないし、イノシシも出ないことは無い。それに商人なのだから、王宮に入るのも無いことではないよ。

でもラベンダが連れていかれるかもしれないのよ。黙ってなんか、いられないわ。

サザンカにしては珍しいな。落ち着いて。

はい。

まあ、今は細かいことは気にしない方が良くかもしれないよ。あの二人のことも、ラベンダのことも。

そう、よね。ランのことも含めて、しばらくは見守りましょう。

なあ、何で王様は

はいはい、そこからは喋らない。聞かれたら困るだろ。

ああ。

それに、これは当人達の問題、だろ。

まっ、そうなんだが。そんなら、何で俺達が付いている必要があるんだ。

王様はあたい達とは、違う人間だからな。わかりっこ無いな。いやな、ここまで来る間にいろいろ考えたんだがな、俺達はいな

くても、

うるさい。お前らしくないな。まさか、恋か？

んなわけあるかよ。確かにサザンカちゃんは美人だが、俺の好みじゃあねえ。

なら、ランか？

だから、俺の女房は、楠くすのき 東京都の中央に相当する所にある町

にいるんだから。

なあラン、起きてるか。

なあに、ラベンダ。

いや、ちよつと無理させたかと思つてな。

私は大丈夫。もっと強くなりたいから。

強くなる、か。どういう事なんだろうな。

え？

いや、僕は強いのか、つてね。

ラベンダは充分強いよ。

ありがとうな。でも、さっきは助けられなかった。

いいよ、それは。

いや、よくないと思う。勝手に剣士として付いてきているんだか

ら、皆を守らないと。

私だって、皆の役に立ちたい。

分かってるさ。強くないといけないな。

うん。

目が覚めると、周りはもう明るかった。起き上がると首筋が痛かった。野宿をする都度に、ベッドが懐かしくなってくる。

私たち六人は朝食を食べた後しばらく休んでから出発した。

しばらく歩くと、森が無くなって平原が広がった。所々に丸い木が生えている。

そのまま歩く事一時間、川が見えてきた。

それほど大きくはない川だが小川とも言えない、曲がりくねった川だった。

川岸まで辿り着いたが、橋のような物は無く、渡り舟も見つからない。

「ねえ、サザンカ、何か見える？」

「見えることは見えるけど。対岸に、船が一隻あるだけみたい」

私はすぐには見つけることができなかったが、サザンカの指すほうを見て見つけることができた。

木製の小舟である。少し波が立っているために、見えにくくなっていた。

「こりゃあ、困ったな。このまま渡るわけにや、いかないだろ」

大犬さんの言う通りだ。歩いて渡ることは無理である。

「困りましたね。このまま待ちますか」

私はシロツメさんの言葉に従う事にした。

「そうしよう。急いでいる訳じゃ、ないんだし」

そう私が言う。

しばらく六人で川岸に座っていると、シロツメさんが話し出した。

「それでは、せっかくでするので、一つ問題を出しましょうか」

シロツメさんが問題を出すのは久し振りだった。シロツメさんの周りに、私を含めて四人集まってくる。董さんは少し離れた所に座

っていた。

最後に問題を出したのはいつだったか。確か、三角形の数を数えた気がする。

「問題です。ここにある猟師がいました。彼はちよつと風変わりです。いつも犬と羊を連れていきます。もちろん、羊の餌となる草も持ってきています。彼は猟に行き、狼を一匹、虎を一匹捕まえました。虎を捕まえる事は予定に有ったので、虎は檻の中に入れられています。彼は猟からの帰り道、川に差し掛かりました。その川には橋が掛かっていなく、代わりに船が一艘ありました。木製の船で、猟師とあとか一つのもの、あるいは動物しか運ぶ事ができないようです。さらに、来る時には犬を檻に入れて運ぶ事ができましたが、虎を檻に入れたまま運ぶと船が沈んでしまいそうです。さて、猟師は困りこんでしまいました。実は、羊は目を離すとすぐに草を食べてしまうのです。それは避けなければなりません。なぜって、家に帰るまでの羊の食料が無くなってしまふからです。まあ、猟師が犬がいれば、羊は草を食べないようにしつけてあります。さらに困った事があります。それは狼です。この狼は凶暴で、目を離すと、犬や羊を食べてしまいそうなのです。檻に入れば大丈夫なようですが、入れたら今度は虎が外に出ることになってしまいます。虎も凶暴で、犬や狼を食べてしまいそうなのです。幸いにも、羊は虎に食べられる事は無いように、虎の前では毛玉のように丸くなっています。猟師は考えました。草、羊、犬、狼、虎、檻。全部を無事に対岸に移すことはできないかと。できるだけ体力は消耗したくないので、移動する回数は少なくしたいとも思います。そしてしばらく考えた末に、皆を対岸に移すことに成功したのです。さて、この猟師はどのように移動したのでしょうか」

「シロツメさん、それ、簡単よ。分別過ぎれば愚に返る、っていう諺通りだよ」

サザン力が即座にそう言った。私は、その言葉の意味も、問題の答えも、すぐに分からなかった。

11:川(後書き)

よく知られている、猟師が狼と羊と草(キャベツ?)を対岸に渡すゲームを拡張しました。

もとのゲームは、こんな感じ。

「ある猟師が川に差し掛かりました。彼は、狼と羊と草を持ってきていました。船が一艘しかなく、その船では、彼自身と、狼または羊または草のいずれか一つしか運べないようです。しかし彼がいないと、羊は草を食べてしまい、狼は羊を食べてしまいます。さて、どうすれば彼は三つの物を無事に対岸に運ぶ事ができるのでしょうか」

ちなみに、シロツメさんの出した問題の答えは、最低が四往復半です。

12：水

シロツメさんの簡単な問題をランがやったのことで解き終わった頃、対岸に人影が見えた。

「皆、川を渡れそうよ」

私の声に反応するようになり、皆が立ち上がる。

それからしばらくして、予想通り対岸の人がこちら側に渡ってきた。

軽く挨拶をして、入れ替わりに私達が乗る。

小さい舟なので、最初は私とランとラベンダとシロツメさんが渡る。続いてシロツメさんが一人で戻り、董さんと大犬さんを連れてくることになった。

四人が乗ると結構小さく感じるが、沈むことは無さそうだ。

シロツメさんが櫂を漕いで舟が動き始めた。

川の流れは速く波も高かったが、舟はゆっくり進む。こうやって舟に座って低い所から景色を眺めると、いつもとは違う感じがするものだ。自分が小さくなって、世界が大きくなったかのような感じ。ふと隣を見ると、ランが何かをやっている。

気になったので聞いてみる。

「ねえラン、何をやっているの」

だが返事がなかった。一心不乱に水面を見つめている。

私もそれをただ見ることにした。

しばらくそうしていると、水面から水のボールが浮き上がってきた。直径15ミリピンチほど。

だが、全体が水面から出る前に、水のボールは壊れてしまった。

「ラン、術の練習か」

一緒に見ていたのだらう、ラベンダが聞く。

「うん。でも、水は凄い力が必要みたい」

私はランの後に続けて言う。

「水も、分子の集まりでしょ。だけど、枝と違って、分子間に働いている力が弱いんだよ。だから枝の時は一ヶ所に力を加えれば全体が動いてくれたけど、水の場合は全体に力を入れないと上手く動かせ無いと思うわ」

もしかしたら気体も動かせるのかもしれないと思った。けどまだ言わない方がいいだろう。気体は水よりも更に分子間力が弱いからだ。

ランがもう一度練習を始めたようだった。

全員が川を渡り終わり、無事に先に進むことができた。

空は、旅を始めてからずっと晴れていたが、いつの間にか陰るようになってきた。そろそろ雨が降りそうだった。

私達は運がいいのかもしれない。このまま歩けば、すぐに次の町、カラスリ町に着く。

雨というのは厄介で、ただ体が濡れるだけならまだしも、地面がぬかるむと歩き難く、疲れ易くなるのだ。

「なあランちゃん、聞いていいかい？」

無言で歩いている中で、大犬さんが聞いた。

「何、大犬さん」

「さっき、船に乗っているとき、何やってたんだ？」

「ちよつとね」

ランが珍しく誤魔化した。もしかしたら悪戯を思い付いたのかもしれない。気をつけておこう。

「へえ、水の中に、魚でもいたのか？」

「うん、そんな所よ」

そこで大犬さんは会話を止め、立ち止まった。

私達もつられて止まる。

「ここ、だよな」

大犬さんが、目の前にある町を見て、いつに無く小さな声で言っ

た。

「ええ、ここでしょう」

シロツメさんが言う。だが、なにか納得していないようだった。目の前のカラスリ町には人影が無かったからだ。

13：無人の町

このカラスリ町には人がいないようだった。

ただ、まだ所々に生活感が残っている。町はまだ生きているようだった。

僕は、死んでいる町の話一度だけ聞いた事がある。

まだ僕が小さい頃、父が調査団の話をしてくれた事があった。調査団に付いて行きたいとお願いしたが断られた事を、いつも鮮明に思い出してしまう。その時に、行かせられない代わりとして、死んでいる町の話をしてくれた。人がいなくなって長いこと経った町は、死んでしまうのだそうだ。

だが、この町はまだ生きていた。最近まで人がいたようだった。

「どういうことでしょうかね」

シロツメさんが誰にともなく言った。

さて、どういうことなのだろうか。何か、村全体が逃げなければならぬような事態があるのだろうか。

「こきゃあ、急いで手分けして、探すっきゃないか。そんなら、俺と董で左っ側、探すぜ」

そう言うと、二人は細い道に入っていった。

「では私は正面を、サザンカとラベンダは右側を、お願いします。それで、ランは・・・」

シロツメさんが言い終わる前に、僕達は右側の路地に入っていた。時間がないような気がした。

路地に入っても、人がいないことには変わりがなかった。

レンガでできた家の壁、ガラスの入った窓、木でできた扉。そのどれにも埃は無かった。

人がいるはずなのに、人を見付けられない。気味が悪かった。

シロツメさんや大犬さんは何か分かったのだろうか。

「なあ、サザンカ、何で僕達は走ってるんだろうか」

前を走っていたサザンカは立ち止まる。こっちを振り向いてこう答えた。

「北の空を見てごらん。黒い雲があるでしょ」

確かに、黒い雲がある。

「それが？」

「さっき渡った川は、南北に伸びているでしょ」

「もしかして、増水するのか」

「そう。川が増水する。ここはまだ雨が降っていなくて大丈夫そうだけど、上流で雨が降っているから、とっても危険だわ。たぶん、村人達はそれに気付いたのでしょうか」

小声で、私は気付かなかったけど、と言った

サザンカは更に続ける。

「だけど、あくまで可能性でしかないわ。もしかしたら魔物が出たのかもしれない。それを確かめないと。それに、村人達がどこに行ったのかもね。さ、早くしましょう」

また、僕達は走り出した。

この町は典型的な形をしているようだ。クノッソスの迷宮に、大通りを三本、全てが町の中心を通るように引いたような町が典型的である。

大小様々な家が立ち並んでいるなかで、左手には常に高い塔が見えている。町の中心に建つ教会の建物だろう。

しばらく走っていると、大通りに出た。殺風景で何も無い。空は相変わらず曇っていた。

そして、その雲の下を何かが飛んでいった。

「何だ？」

つい止まってしまふ。サザンカも気付いて止まったようだ。一緒に空を見上げる。

緑色の髪をした少女が、箒に乗って飛んでいる。

「ラン、なのか」

「ええ、そうでしょうね。シロツメさんが指示をしたのでしょう」
聞き逃したが、最後に確かにそんなような事を言っていた気がする。

ランは顔をきよろきよろさせて何かを探しているようだったが、僕達を見付けるとやって来た。

「見つけた」

そう言って地面に立ち、箒を立てて持つ。箒はランの体よりも大きい。こう見ると、本当の魔法使いみたいだ。

「良かった、間に合って。あのね、川が増水しているの。図書館に皆がいるから、早く行って」

早口でそう言つと、また飛び立って行った。

サザンカと一度顔を見合わせ、すぐに大通りを中心に向かって走り出す。どうやら、図書館なら安全らしい。多分、町の反対側にあるのだろう。

それにしても、ランって空を本当に飛べたんだな。

図書館はかなり大きかった。ボタンのものよりも大きい事は確かだった。

中に入ると、シロツメさんが出迎えてくれた。

「二人とも、その階段を上がって。二階に董さんと大犬さんもいるから」

私たちは大きな階段を上った。二階には私達以外にも、町の人と見られる人が沢山いた。

「ねえ、シロツメさん。ランはどうしたの」

「ランは頑張ってみるそうだし」

「そうなの」

そう言った瞬間、ラベンダが立ち上がった。そして、階段を駆け下りていった。

大丈夫だろうか。心配になるが、今の私には何もする事ができない。

「ねえ、何で止めなかったの？」

「ラベンダの事がいい、それともランの事がいい」

「ランのほう」

「ランはやればできる子だからだよ」

確信を持った目で見つめられると、反論はしなくなってきた。目を逸らす。

「本、読んでくるわね」

そうシロツメさんに声をかけて、気分を変えるために棚のほうへ行く。

私の身長は20ピンチ程度だが、その三倍以上の高さまで本が入れられていた。

古い本から新しい本まで色々あった。適当に一冊を取ってみる。題名は『気体の分子運動論』だ。最新の物理研究の分野である。

ポタンの図書館にはなかった内容のようだった。

ざっと中を見てみる。

あれ、この式はなんだろう。2分の1m、vバーの2乗イコール、2分の3kラージT？

その式が気になったので、その本を持って近くの椅子に座って読むことにした。

私は空を飛んでいる。

久し振りで、しかもいきなり言われたので、飛べるかどうか不安だったが問題はないようだった。

サザンカとラベンダを見つけた後、私は町の北部に来て川を眺めていた。

大きくうねり、水位が高い部分からはもうすでに水が外に漏れ出していた。濁った茶色の水だ。

頑張らなきゃ。

そう心に決めて、川に近づこうとした時だった。

急に、目の前が真白になった。気が筈から離れてしまい、私は地面に向かって落ちていった。

15：魔法使い

どれ位時間が経ったのだろうか。

目を開けると、目の前には見たこともない服を着た女性が、私を横向きに抱っこしていた。

「だいじょうぶ？」

にっこり微笑んで私の顔を見ながら、彼女は聞いてきた。

「ぎこちなく頷くと、彼女はホッと息を吐いた。」

「ビツクリしちゃったのよ。まさかこの世界に魔法使いがいるなんて、知らなかったから」

「ま、ほ、う？」

「そう、魔法。あなたって、空を飛べるのネ。久し振りだな、あいつ以外で魔法を使える人を見たのは。もう半年くらいあいつを追っていたからネ」

「そういうと、彼女は私を地面の上に立たせてくれた。」

「少しふらつきながらも、しっかりと立つことができた。」

「あ、自己紹介をしていなかったわネ。私はレイアよ。よろしくネ。あなたは？」

「私は、えっと、ランです」

「そこでレイアといった女性の顔を見た。」

「私よりは年上だろうか。肩まで伸びた金色の髪の毛、大きな黒色の目。そして白い半袖シャツに茶色の膝丈のスカート。白い紐靴を履いている。」

「ラン、か。花の名前だったかな。蘭。綺麗な花の名前だけあって、ランちゃんも可愛いネ」

「じっと私を見てきた。恥ずかしくて、顔を伏せてしまう。」

「あ、そうだ、ランちゃんの魔法って」

「そういえば、魔法って聞くと軽い胸騒ぎがしている。」

「あの、魔法、って言うの、止めてもらえませんか？」

レイアさんはポカンとした顔をしたが、すぐにもとの笑顔に戻った。

「分かった。それじゃあ、ランちゃんの術って、どんなのなのなの？」

私の術について、ざっと説明した。その後、レイアさんも彼女自身の術について説明してくれた。

この人の魔法なら、何とか考えても大丈夫そうだった。口には出したくもないが。

火 (fire)、水 (water)、風 (wind)、雷 (thunder)、氷 (ice)、地 (rock)、光 (light)、闇 (dark)。これら八個を総称して基本魔法。

防 (shield)、治 (heal)、封 (seal)、反 (reflect)、移 (move)、召 (summons)、加 (add)、想 (feel)。これら八個を総称して補助魔法。

魔 (enchant)、時 (time)、飛 (leap)、無 (annul)。これら四個を総称して応用魔法。

オダマキ語のような呼名、ナデシ語のような表記、そしてエーデル語 ドイツ語 のような唱詠うたいだった。

こことは別の世界ではこれら二十個の要素により魔法が成り立っているそうだ。

ここで、反 (reflect)、召 (summons)、加 (add)、想 (feel)、時 (time)、飛 (leap)、無 (annul) の七個を除いた十三個が、彼女の普通の魔方陣に使われるものであるそうだ。つまり十三芒星ということ。

もちろん彼女は二十の要素全てを使えるらしい。

そして、私の目の前が明るくなったのは、レイアさんが飛 (leap) をして平行世界から私の目の前に移動してきてしまったためだそうだ。誰かが空を飛んでいるとは思わなかったようだ。

「ところで、ランちゃんは空を飛んで、何していたの？」

「あっ」

すっかり忘れていた。

「川の水が溢れていて、この町の人々が避難をして、私達がこの町に来て、私は洪水をなんとかしよう」と

「やっぱりネ。だけど大丈夫。私がなんとかしておいたからね」

ほっと肩を下ろす。

「それで、レイアさん、ここはどこですか？」

レイアさんは考え込んでしまった。

そしてしばらくして言った。

「分かんないネ」

16：搜索後

ラベンダは少しすると帰ってきた。この町にも雨が降ってきて、危険だと判断したようだった。

雨が止んでからも水が町に浸入することは無かった。私はしばらく図書館の中にいたので見なかったが、川は穏やかだったそうだし。しかしランが帰ってこなかったため、私達は町の周囲を探した。曇っていて時間が分からなかったが、日が天頂に達したであろう頃に集合した。しかし、誰もランを見付けられなかったようだった。ひとまず町の食堂へ行つて、昼食を取ることにした。

「ねえ、ランはどこ行つたの？」

答えが返ってこないと知っていながらも、聞いてしまう。これにシロツメさんが答えてくれた。

「私には分かりません。川には強固な堤防が築かれていましたけれども」

「強固な堤防？」

「そう。しっかりと固めた土が川の両岸に作られていましたね」

「それって、ラン一人じゃあ、できない事よね」

「そうですね」

図書館から外に出た人はいなかった。ということは、他に外部から誰かが来て、ランを助けたことになる。フロウ軍の一旅団程度の人が必要はずだ。

それだけの人が来たのなら、誰かが気づいたはずだ。だけど、誰も気づいていない。つまり、少人数でその堤防を築いたことになる。

「ていうかさ、今は堤防を誰が作ったか、じゃなくてランがどこにいるかを考えるべきだよ」

ラベンダに言われてハッとす。

私としたことが、ランのことを考えていなかった。

「馬車とかの音はしなかったから、歩いているはずだ。となると、そう遠くには行っていないんだ。でも、さつき探したときはいなかった。足跡も無かった」

「つまり？」

「つまり、ランは空を飛んでどこかに行ったことになる。それなら、この辺りにいない理由が説明できるんじゃないかな」

「という事は、ランは一人でどこかに行った、っていう事になるわよね」

「そうだな。とっても速く動けたり、ランみたいに空を飛べたりしない限りは、そうなる、だろう」

「なあ、ちよいと、口挟んでいいかい？」

董さんがそう言ってきたので、続きを促す。

「話を聞いていると、どうやらランちゃん魔法使いかい？」

その質問に、私は本当の事を話す。

それを聞いて、董さんが話し出した。

「関係あるかあ、分からんが、一応言っておくか。あたい、丁度あった達が図書館に入ってきたくらいに時にさ、窓の外が少しばかり光ったんを見たんだよ。それも花火みたいにな」

「花火？」

ラベンダが不思議そうな顔をした。無理も無いだろう。花火はナデシ国の夏の風物詩で、この辺りでは見ることは無い。

「ああ、花火な。この辺りじゃ知らないかい。まあ簡単に言っちゃえば、空中に丸い光の球が出現したと思や、いいんだろうよ。確か、北の方だったと思ったが」

空中に突然現れた光の球か。ランと何か関係があるのか。

いや、そもそもランはそんな事ができないはずだ。物を動かすだけなのだから。

「となると、他に誰かがいたのかしら」

そう呟いてみた。

17: 戻る

「分かんないネ」

レイアさんがあっさりと言った。

「ここがどこだか、分らないの？」

「そうネ。分らないわネ」

周りを見渡すと、丸い形をした木が所々に生えていて、山が遠くにあった。

「ごめんなさいネ。ランチちゃんの事考えないで、あいつの事捜しちやったから、もとの場所に戻れなくなっちゃったの。本当に、御免」
そう言っつて、私にお辞儀をしてきた。

「いえいえ、大丈夫ですよ、多分」

レイアさんは首を左右に振る。

「実はネ、ここはもうあなたのいた世界じゃあないの。飛（lea p）しちやっつて」

啞然とする。

開いた口が塞がらない、とはまさにこの事だった。

「うそ？」

レイアさんは、もう一度首を左右に振る。

「ほんとじゃあないことはないなんてことはないような感じがしないのよ」

「はい？」

「だから、ほんとじゃあないことはないなんていいたくはないけど
そうじゃあないような感じがしないことがないことはないの」

意味が分からない。つまり、どうということだろう。一応聞いてみる。

「つまり、嘘、という事ですか？」

「嘘じゃあないネ」

やっぱり、違う世界に来てしまったようだ。

「それじゃあ、帰れないんですか？」

「え？ 飛（leap）する必要はないよ」

どういう事なのか、分からなかった。頭の中で、本当と嘘がめまぐるしく回転している。

「えっと、つまりレイアさんは、飛（leap）していない、という事なの？」

「そうよ。さつきそう言ったじゃない。うふふふ」

レイアさんは笑い出した。

「まあ、まあ、この話はこれでお終いにして。私はこれからあいつを追わないといけないから、あなたは自力でさつきの町に帰ってね。それじゃあ、頑張ってね」

ウインクをすると立ち上がり、少し私から離れた位置に立つ。一瞬淡い青白い光が地面に現れた。多分、あれが魔方陣なのだろう。ずっと前に絵本で読んだ記憶があった。そんな事を考えているうちに、レイアさんは霧のように消えてしまっていた。

残ったのは私一人。右手を見るといつのまにか箒を握っていた。

箒に乗って、ひとまず高い所から周りを見た。

雲の切れ間から陽射しが射している所が何ヶ所か見える。

ほぼ真上にあるらしい太陽からだど方角というものが分からなかったが、右手下方に曲がりくねった川が見えた。眼前に広がる山の方から続いているようである。

あれは今朝渡った川だ、と思いその川に沿って山とは反対側に向かつて飛ぶことにした。

しばらく飛んでいると、川の右岸から離れた所に森が見えてきた。その森から川に向かつて道が一直線に続いている。川を渡った先にも続いている、その先を見ると町があつた。

円形で、中心には協会があり、大きな図書館も見える。カラスリ町だろう。

どうやらそんなに遠くまで行っていなかつたようである。

このまま飛んでいくのはなんとなく恥ずかしかつたので、離れた場所に下りた。そこから少し歩いて町の中に入った。

最初に来た時とは打って変わって、人が沢山歩いていた。

しばらく中心部に向かつて歩いていると、見知った顔を見つけた。

「おーい、みーんなー」

五人が一斉にこつちを向く。

「おっはよー」

こんな大きな声を出したのは久し振りだった。ボタンにいた時は、よく叫んでたな。

サザンカがこつちに向かつて走り出し、続けてラベンダがやってくる。他三人はゆつくりと歩いてきた。

「どこに行っていたのよ、ラン」

「ごめん、ごめんね。ちょっと気を失つてたみたいで」

「大丈夫だったか」

「うん。平気」

サザンカとラベンダに笑顔を見せる。

「レイアさん、っていう人に助けられたから」

彼女が魔法使いだった事は言ったほうがいいのだろうか。

そう思いながら目の前の二人の顔を見ると、固まっていた。

「あれ、どうしたの？」

聞いてみると、サザンカが硬直を解いて逆に聞いてきた。

「レイアって、この世界の人の？」

「えっ、違っつて言っていたけど」

「だよな」

「何で、サザンカが知ってるの？」

「いや、ううん、何でもない。何でもないので」

そう言いながら首を横に振る。

「それで、ラン、その人ってどんな人だったの？」

「えっと、肩まで伸びた金色の髪の毛で大きな黒色の目で、白い半袖シャツに茶色の膝丈のスカートを着ていて、白い紐靴を履いていて。それで」

そこまで言っただけだったが、二人は悩み込んでいた。何か問題でもあるのだろうか。

口に出さなくても顔に出してしまったのだろう。いつの間にか二人の後ろにいたシロツメさんが説明してくれる。

「昔話になるけれど、そのレイアという少女は、二百年前にカラー国に来た、という伝承が残っているんだよ」

「二百年前のカラー国？」

「これがどういう事かは、ランでも分かるよね。二百年前にカラーで何が起こったのか」

「カラー、戦争？」

私でも知っている、有名な戦争だった。

19：伝承

二百年前、つまりスパチュラ暦3250年、カラー国 エジプトに相当 で人間と魔物との間に戦争が起こった。

そもそもの発端は、レイアという魔法使いの少女から始まる。

レイアはひよこりと現れたかと思うと、突然山を一つ壊した。

壊したというと聞こえはいいが、結局の所は蒸発させたと言ってもいい。

そして、その少女はすぐにいなくなってしまったそうだ。これがきっかけ。

その山は、カエデ山と呼ばれ、魔物の一種のコユピンが沢山住んでいた。名前から想像できるだろうが、かなり温厚な性格の魔物だ。近くのカラー国と交易をしていた時期もあった。

だがあの少女のせいでコユピンは怒りを覚え、人間に報復を始めたそうだ。

勿論、とばっちりを受けた人間は交渉を試みたが上手くいかず、自分達を守るために反撃をしなければならなかった。

とまあ、これが事実ではあるのだが、実際の所、現在に伝わっている伝承は、シロツメさんに言わせるところなる。

「二百年程前にレイアという少女が、突然この世界に来たんだ。彼女は自分を術使いと自称して、カラー国に取り入った。何でそんな事をしたのかも、どういう風に取り入ったのかも、今となっては伝わってはいないが、どうやら当時のカラー国王は魔物が大の嫌いだったらしい。そこで国王は彼女に頼んで近くに住んでいたコユピンを、その住家のカエデ山ごと消し去ったんだよ。それに激怒した魔物たちは人間を攻撃し始めたんだ。国王は彼女にもう一度魔物を攻撃させようとしたらしいが、彼女はいなくなってしまった。そのため、国王は軍を動かして魔物に対抗したんだ。それがきっかけとなってカラー戦争は始まったんだよ」

事実とは違う歴史が伝わる事は、よくある事なのだ。

20：疑問

宿を取った後、部屋でシロツメさんの話を聞いて、僕達が気にしていた事が何なのかランは分かったようだった。

「それなら、問題が無いと思うよ。レイアさん、すぐに飛（leap）したから」

「飛（leap）？」

「うん。たぶん、異世界に飛ぶことができるみたいなもの。それで、レイアさんって20個も」

そこで中途半端に口が止まる。

サザンカが手に持った本を見つめながら返事をした。

「へえ、凄いね。でも信じられないな。そんな事、できる訳が無いじゃないの」

「ねえサザンカ、その本、何？」

ランはサザンカ言葉を無視して聞いた。

「え、これ？」

「うん」

「ランには難しい本よ。空気を構成している分子と、気温の関係を説明しているのよ」

表紙には『気体の分子運動論』と書かれていた。

「分子運動論か。最新の研究だよな。王立研究所でも実験をしていたな。熱が、熱素によるものじゃあなくて、分子が運動する事で引き起こされるんだろ」

「まあ、大体そういうこと。正確には、分子の運動そのものが熱なんだけどね」

そこから、僕とサザンカは流体力学に関することを色々話した。

僕には有意義だったが、シロツメさんや董さんや大犬さん、特にランは話に付いていけなかったようだった。

翌日、僕たちはカラスリ町を出発した。空は曇っていたが、地平線の近くには青空が覗いていた。

左側に山脈を見ながら、道に沿って歩く。

ランとラベンダが僕とサザンカの前を歩き、後ろに董さんや大犬さんがいる。

しばらく歩くと、後ろから声が掛かった。

「なあ、ちよつといいか」

声を掛けてきたのは大犬さんだった。

「何でしょう」

「一つ気になっていたんだが、何で旅をしているんだ？」

「さあ。何でも、ランが自分の術について知りたいことがあるんだ
そつです」

一緒に旅をし始めた時の事を思い出す。

「ランちゃんの術か。あの念力は、確かに不思議だな」
「念力？」

「ああ、ああやって、離れた所から物を動かす技だな」

そんな技を使える人がナデシ国にはいるのか、と思ったが、すぐに大犬さんは付け加える。

「言つとくが、念力つちゆう大層な名前は付いてるが、そんなもん
使えるやちゃ、いないぞ」

「そつ、ですか」

少しだけ残念に思ったのは、気のせいだろう。

それにしても、本当になぜランは旅をしようと思ったのだろうか。
緑色の髪を揺らしながら楽しそうに笑うラン。その隣にいるシロ
ツメさんは相変わらず笑ってはいなかった。

そつ、シロツメさんに付いても気になることは多い。魔物と戦っ
ていた時のあの目。ログハウスでの会話。

「ねえサザンカ、ランって何で旅に出ようと思ったの」

思ったことを聞いてみると、しばらく経ってから返事が返ってきて

た。

「話してもいいのか迷うけど、やっぱりラン本人から聞いたほうがいいと思うな。まあ、昔のある事件がきっかけだったんだけど。それで魔法に触れなくなっただのよ」

本人の悩みを他人が勝手に言うことはできない、と言うことだろう。

いつか機会が来た時に聞くことにした。

21：平行世界

もう、大分歩いた。

「アカンス国まで、あとどれ位なの？」

今は野宿の準備中だった。

「国に入るまで、二十日かな。その頃には収穫月メッシュドールに入っているな」
隣にいるラベンダが答えた。私は枝を折ってはいるが、木には登っていない。

しばらく枝を貯めていると、ラベンダが急に聞いてきた。

「なあラン、なんで旅をしてるんだ？」

私はしばらくその質問に答えられなかった。いや、答えたくなかったのかもしれない。

そして、やっと出てきた言葉はこういうものだった。

「うーんと、忘れちゃった」

顔は笑っているだろうか。引きつっているかもしれない。

でも、本当の事は言いたくなかった。

ラベンダはそれで納得してくれたようだった。それを見てほっとする。ちよつとの罪悪感は、大きな安堵によつて打ち消されてしまった。

「そうか」

そう言っただきり、黙っていた。

夕食を食べ終わった後、私はサザンカに気になっている事を聞いてみた。

「ねえサザンカ、ちよつと聞いてもいいかな」

「何？」

「レイアさんが言っていた、平行世界って、実在するの？」

「それは、伝説上ならば確かに存在はしているわ。だけどこの現実

となると、証拠不十分ね。悪魔の証明みたいに、有るとか無いとか言うのは簡単だけど、それを示す事ができないのよ」

「悪魔の、証明？」

「悪魔がいるかいないかを問題にした時に、存在しないと言う立場の人は何もしないで、存在すると言う立場の人が悪魔がいるとのみ証明すれば充分だ、という考え方よ。身近なものにたとえると、例えば、カラスは皆黒い色をしているという事を証明しようとしたときは、この世界にいる全部のカラスを示さなくてはいけないで大変になるの。でも、カラスは皆黒い色をしていないと言う事を証明しようとする時は、ただ一匹でも黒くないカラスを示せば充分なのよ。つまり、賛成する側か、あるいは反対する側の証明が非常に難しいときには、その逆の立場の人が証明をするべきだ、という事。実は、黒くないカラスはいるけどね」

「そうなんだ。それで、平行世界は存在するの？」

「さつきも言った通り、不確かだから、私は何も言えないわ。ただ、まあこれも同じ事なんだけどね、レイアさんが魔法使いかどうかも、そこで急にサザンカの言葉が止まった。

「どうしたの？」

と聞いてみるが、返事がすぐに返ってこない。

シロツメさんも私を見て少し驚いているようだった。滅多に変わらない顔が、微妙に変わっている。

「ラン、魔法って、言われても、大丈夫、になったの？」

サザンカから途切れ途切れに紡ぎだされた言葉に、自分自身が驚く。

魔法、マホウ、まほう、魔法。

考えても嫌な気持ちかほとんどなかった。

「魔法、て言っても、大丈夫、になったみたい」

髪の毛を手でだらしなく掻きながら、照れ笑いをする。何に照れているかは自分でも分からなかったが。

レイアさんの話をした時には、本当はもう言えたのだろう。ただ、

条件反射で言わないままだったから気付かなかったのかもしいない。

「そう。それは。良かったのではないでしょうが」

落ち着きを取り戻したシロツメさんがそう言った。

22：国境の町 前編

魔法という物が大丈夫になってから数日。ボタンよりも大きい町に到着した。

フロウ国とブルベリ国　スロヴェニアとクロアチアとボスニア・ヘルツェゴヴィナをくっ付けたような国　とを繋ぐ町、ラフレシアだ。

道は白い石が敷き詰められていて眩しい。遠くに城壁のような石の壁が、行く手を阻むかのように立っているのが見えた。あれが国境。

「大っきいね」

このごろ、ボタンにいた頃の気持ちが戻ってきていた。旅を始めた頃は不安が大きくて、さすがの私も悲観的になっていたのだが、この頃は元気が出ている。

旅に慣れたせいなのだろうか。レイアさんに会ってから、調子が戻ってきたと思う。

「本当に。さすがにフラウと比べると小さいけど、フロウ国の町の中では五本の指に入る大きさね」

サザン力が答える。

町は人で賑わい、レンガ造りの家の前には露店が並んでいた。威勢のいい声が絶え間なく聞こえる。

「ねえサザン力、何で国境に跨るように町があるの？」

境町と一般的にいわれる町は、その中心を国境が通っている。このラフレシアも境町だ。

「関所の意味があるわね。出入国者の管理が大きいわね。勿論、町の外に出てしまえば壁なんて無いから余り役には立ちそうに無いんだけど、遠い昔はそんな事は無かったのね」

「それでじゃあ、何で今も残ってるの？」

「今は、法律の違いがあるのよ。ただの壁だけど、あのこちらとむ

こうでは、法律が違うの。そう言えば、この町は良い方ね。一部の町は、法律が違いすぎて、壁の両側で貧富の差が激しすぎてしまうの。そうになると、その町は治安がどんどん悪くなるのよ」

感心していると、いつの間にか置いて行かれてしまった。

人混みの中に董さんの紫の髪を見た気がしたが、すぐに見えなくなる。

身長17.3ピッチの私は、サザン力達に気付かれないまま迷うことになってしまった。

23：魔物を学ぼう！～第一節

第1節・・・魔物の歴史とその分類

魔物とは生物学上、一般の生物が突然変異を起こし、広義では高知能を持ったもの、狭義では人間に害を及ぼすものである。

この本では、以下広義の意味で魔物を用いる。

魔物が最初に発見されたのは、1600年の頃である。当時のカミツレ国において狼のような魔物であるカブリサが発見された。

その頃から、彼方あちこち此方で魔物の出現が報告されるようになった。

基本的にはプラナ大陸に集中している。これは勿論、オダマキ大陸における研究が進んでいない事もあるので注意してもらいたい。

魔物と言っても、読者の皆さんは凶暴なものだと勘違いしやすいようだが、温厚な性格のものも多く存在している。

事実、人間と魔物とが交易をしている地域も存在する。

そもそもなぜ魔物が発生したかと言う事は、現在も議論が続いている。

偶然変異説が有力ではあるが、同時期に多くの魔物が発生した事を説明しきれしていない。故意変異説は人的に魔物を発生させたという説だが、現在の技術でもそれは不可能である。他にも、多重変異説や増殖説、宇宙人説など多くの説が存在する。

生物学では、魔物はそれぞれ以下のように分類される。哺乳類はコニコリン黄鱗、鳥類はアラエル空使、爬虫類はトフロン竜、両生類はサラマンダー火蜥蜴、魚類はセイレーン人魚、昆虫はフェアリー妖精、植物はユゲドラシル世界樹。これに含まれない魔物は、一般にスライム粘性体と呼ばれるものしか現在確認されていない。

また、知能の違いにより階数をつけることもある。1が低く、10が高いとするのが一般的であるが、0から9を用いる事もある。1から20を用いて更に細分化する研究者もいる。

人間と魔物の中間の生物も存在し、一般に獣人と呼ばれている。半獣という呼び名は差別用語であり、好ましく無い。

獣人の特徴としては、ある特定の物事に能力が特化していることである。身体能力の高いものが多いが、中には記憶能力が高いものや、交渉に長けたものもいる。

魔物や獣人の生活体系は、普通の生物のようなものから人間と同じようなものまでいる。これは、身体能力の限界によっての違いであり、人間のような生活をしていないからといっても、知能が低い訳では無い。この辺りは誤解しないでもらいたい。

二章からは、それぞれの分類の魔物について、特徴を見ていこう。

24：国境の町 中編

私は迷っている。

町を彷徨っていたのだが、サザンカ達の姿を見つけることはできないでいた。

周りは人だらけで、自分がどこにいるのか全く分からない。

今は大通りから外れた路地にいる。喧騒もここなら多少は静かになつた。

壁に寄りかかると、今までの疲れが出たのか座り込んでしまった。このまま誰にも見つけてもらえないのではないか、と一瞬不安がよぎる。

そもそも、何で私はこんな旅に出してしまったのだろう。

要因は分かっている。学校の五年生、つまり今から三年ほど前のあの事件だ。多分、季節は秋だっただろう。

ランやサクラ達と下校をしていると、正面で誰かが襲われているのが見えた。

襲われているのは同じ学校の生徒。物取りに必死に抵抗をしている。

見て見ぬ振りはサザンカが許さないだろうから、私は近くに寄っていった。

生徒は私に気付き、その様子に不審なものを感じた物取りも私を見た。

その一瞬の隙を付いて、私は術を使って物取りを地面に押さえつけた。生徒に逃げるよう促すと、彼女は走り去っていった。

「こっの、魔法使いめが」

私の視線が物取りに据えられる。

「お前、怪物、異形だ。有り得ない。嘘だ。お前なんか、いる筈が」
私は知らず知らずのうちに術に力を込めていた。後で聞いた話だが、私は五月蠅いとずっと叫んでいたようだった。

「うぐつ。魔法、使い、なんか、いては、いけない、だ。災い、元凶」

物取りの体の半分以上が土に埋もれていたらしい。この時にサザンカは止めに入ったようだが、私は覚えていない。

「裁き、が、下る、ぞ。いつか、ま、じよ、は、死、を、見、よ」
そこで物取りは事切れた。しかし、私は術を使い続けていた。

それから気付いた時には、学校の中にいた。私の周りには、サザンカとサクラ達、それに校長先生や五学年の先生、警察の制服を着た人も何人かいた。

「あの、私、何を」
したのですか、と聞こうとしたのだと思う。今となっては曖昧なのだが。

そこで、私は泣き出した。泣いて、泣いて、泣いたそうさ。

後でサザンカから聞いた話によると、私は正当防衛という事で刑罰を免れたようだった。それと、私の術に関しては、警察には知られていない。

当事者である私がこの事を余り覚えていない。サザンカに言わせれば、よくある事、なのだそうだが、私はそれでは納得が出来なかった。

何か大切な事を忘れてしまったような。何か大切な物を失ってしまったような。そんな空虚感がずっと残っていた。

それを埋めようとした事もあった。サザンカから、サクラから、話を聞いた。だけど途中で拒絶した。否、否定した。そんな事は起こっていない、と。

もちろん、それは無駄な苦勞だ。実際に起こってしまったのだから。

でも、どこかで否定をしたがつている自分がいた。

25：国境の町 後編

いつの間にか眠ってしまったようだ。

目を開けると、周りは薄暗くなってきていた。

そういえば、何で魔法という言葉が大丈夫になったのだろうか。

あの過去も今すっかりと受け止められた。これは、嬉しかったと同時に、悲しかった。自分が、人を、この手で、殺してしまったのだから。それを、認識したのだから。

私はゆっくりと立ち上がり、大通りを見た。

さつきよりも人が増えている。夕食の買い物をする女性がほとんどだった。

大通りに出て、国境の壁が見えるほうに進む。

露天の数も増えているようだった。所狭しと並んでいる。

今ごろサザンカたちは心配しているだろうな。どうやって戻ろうかな。

暗くなり始めた道は、真赤に染まっていた。人の影になっている部分は、真黒くなっている。

私の影を見てみた。

遠くまで伸びるそれは、周りから全てを飲む込んだかのように真黒だった。

影踏み、という遊びを突然思い出す。

鬼というものに扮した人に影を踏まれたら、自分が鬼というものになるのだ。鬼、とは何だったか忘れてしまったが。

私の影は、通り過ぎる人に踏まれている。何度も何度も踏まれている。

別の人の影がかぶる事も良くある。そうになると、境目が曖昧になる。私の影が曖昧になっている。

「ラン」

誰かが私の名前を呼んだ。誰かが私の影を踏んでいる。私は鬼に

なつたの？

「オ、二？」

気持ちをそのまま言葉にする。

影を踏んでいる相手は、困ったかのように近づいてきた。

「ラン、迎えに来たよ」

顔を上げる。黒いさらさらの髪の毛、茶色い瞳。私が見ても、美しいと思う顔立ち。

「サザンカ？」

その相手は、私の問に答えるように首を縦に振る。

「大丈夫？」

心配させてしまった。私、誰かと約束をしたはずなのにな。

私が頷くと、相手はにっこりと微笑んだ。

「ラベンダとかシロツメさんとか、勿論、董さんも大犬さんも、皆心配してるよ」

そうだ。ラベンダだったな、約束したのは。

「宿を取ってあるから、そこに行こう。皆、そこにいるから」
私は抱きついた。

宿に戻った。

夕食を食べた。

何かを話した。

謝られた。

そして、寝た。

ランの目がきらきらしている。昨日との違いがほんの少しだけ恐
い。

それに僕にはこれを見てもそこまでの感慨は無かった。

目の前にあるのは、ただの壁だ。

だがランは違うようで、口がずっと動いている。

凄い、綺麗、初めて、うわー、本当だ、白い、隙間が無い、高い、
大きい。

そんな事を呟いているようだった。

「ラベンダ、準備はいい？」

サザンカに言われる。勿論、準備はできている。

もしも僕が王子だと知られたら、多分王宮に連れて行かれるだろ
う。

多分、といったのは、今の王の力を持ってすれば、僕の事はすぐ
に捕まえる事が出来るはずだからだ。それなのに、捕まっていない。
捕まえる気が無いのか、それとも僕は生簍の中の魚に過ぎないの
か。

後者でないことを祈ろう。

「大丈夫。準備はできている」

そう言う。

「それでは、行きますか」

シロツメさんの言葉で、皆が動き出す。

壁沿いにしばらく進むと、アーチ状にくり貫かれた部分が見えて
きた。

あそこが関所だ。警備員が何人かいるようだ。

帽子を目深にかぶる。

そのまま関所を通る。

何事も無く、国境を通り抜けた。

ブルベリ国側のラフレシアも、サザンカが言った通りあまり変わらなかった。

「何も無かったわね」

サザンカが呆けたように言った。

僕も拍子抜けだった。声さえ掛けられなかったのは、警備が甘いという事なのかもしれない。

「なになに、何か起こるはずだったの？」

ランがサザンカに詰め寄る。

実は、ランには僕が王から追われているであろう事を伝えていない。余計な心配はかけない方がいいと思ったからだ。

「何でもないわ。ただの噂話よ」

そう言うとサザンカは適当な事を喋り始める。

「ランがいなかった時に聞いたんだけど、どうやら窃盗団がこの町にいるらしいの。それで、その窃盗団というのが六人組なの」

「なんだ、そういうことか」

ランは納得したようで、町の景色を見ることに興味移ったようだった。

27：水鉄砲

昼食を食べ終わり、ラフレシアの広場で私たちは休んでいる。白や青、黄、緑、赤などの原色に塗られたレンガが円形に並べられ、その中央には真白な噴水がある。噴水は刻々と姿を変え、見ている人を飽きさせる事は無い。

走り回る子供達、買い物袋を持ったまま立ち話をするお母さん達、学校帰りなのか制服姿のままのカップル。

そよ風が吹き、私の髪をさらさらと揺らす。

軽く髪を掻き上げると、右の奥のベンチに座っている学生服の男の子と目が合った。一瞬だけだったが、目が合った。

私は視線を戻し、噴水を眺める。

水が放物線状にあらゆる方向に出ており、まるで林檎のように見えた。それもすぐに形を変え、鯨のように僅かな量の水を高く打ち上げる事を幾度も繰り返す。

「平和ねー」

左側から突然聞こえてくる言葉。

「ラン、今まで平和じゃあなかったの？」

私は聞いてみる。

「うっん、そんなことないよ。でもね、なんとなく、平和だと思っただの」

「なるほど」

何に納得したのかは、私にも分からなかった。

鳥の囀りが聞こえる。子供達のはしゃぐ声が聞こえる。お店の人と値段交渉をする声が威勢良く響き渡る。

確かに、平和だ。

だが、何をもって平和とするのかは、私には分からなかった。

絶対的な平和は存在するのだろうか。相対的なものしか存在できないのではないか。

所詮、生物の考える事は相対的なものでしかない、と私は思う。
光有る所に影有り。

「きゃっ」

ランが急に立ち上がったかと思うと、悲鳴をあげた。顔は喜んで
いるように見える。

「もう、何するのよ」

ランが見る先には、男の子が数人。おそらくランよりも4才ほど
年下だろう。私よりも5才下になるのか。

男の子達は手に水鉄砲を持っていた。ランの服は、僅かに水で濡
れている。だが、それ位で着難くなるような服ではなかった。

「待て、こちら」

その声が発せられると同時に、男の子達は公園内をばらばらに走
り出した。始めからそうするつもりだったのだろう。計画的のよう
だ。

対するランは落ち着いたもので、リーダー格の男の子を追ってい
る。

明らかにランの走るスピードはいつもより遅い。遊びに付き合っ
ているのだろう。

シロツメさんとラベндаは広場に入るとすぐにどこかに行つてし
まったし、董さんや大犬さんは本職の旅商人として大通りで商店を
開いている。昨日開かなかつたのは、昼間の方が何かと便利だから
だそうだ。

ランと二人でベンチに座っていたが、一人になつても何も起きな
いのは当たり前前の事だ。

そう思っていた矢先、私に声を掛けてくる人がいた。

28・話(前書き)

ん。なんだかこの男子は全く本編とは関係ないような気がするのです。ていうか、この話の中ではこの部分以外での出演は無いと思います。

「あの、ちよつといいかな？」

友好的に話し掛けてきたその相手は、先ほど目を一瞬だけ合わせた学生だった。

年齢は私と同じか少し上。

という事は、中等学校の生徒だろうか。ポタンには初等学校しか無かったが、このラフレッシュアには中等学校と高等学校もある。ちなみに、大学校は基本的に首都にしかない。

「何でしょうか？」

微笑みながら、その学生を見詰める。

「いや、ちよつと話がしたくなってね。この町の人じゃあないみたいだったから」

「よく分かったのね」

「そりゃあもう、君みたいなベツピンさんなんて、この町に一握りしかないからね。住んでいたなら、僕は何度か見掛けて覚えているはずだから」

真白の歯を見せびらかすようにして微笑む学生は、どことなく好感が持てた。

「私、サザンカ。貴方は？」

「僕はメロン。よく、美味しそうな名前ってからかわれるんだけどね」

メロンと名乗った学生は、私の隣に腰掛ける。ベンチが軋んだ。

「サザンカか。いい名前だね。確か華国　長江中流域あたりに位置する国　にある花だよな。確か」

「ええ、そうね。そもそも、人名や地名に植物の名前を付けるようになったのは、丁度スパチュラ暦100年の頃だと言われているわ。一番有力なのは、花に信仰を寄せていたこの辺りの民族が人名に花の名前を付け始めた事が切欠だ、という説よね」

「へえ、そうなんだ。サザンカさんは物知りだね」

「そんな事は無いわよ」

「でも、今持っている本、それ凄く難しいと思うけど」

私は『妖精と御伽噺』をヒナंगाバ語で読んでいた。この本は、フェアリーアンドデイル各国の説話や神話や民話や童話をヒナंगाバ国独自に書き換えたものを、毎晩就寝前に子供に語り聞かせるという形式で書かれている。そして少し前に読み終わったばかりだった。

「これは『妖精と御伽噺』よ。読んだ事、あるでしょ？」

「えっと、うん。学校で一通り読んだけど、これがそうなの？」

「たぶん学校だと、フロウ語で読んだのでしょうか。これは原文のヒナंगाバ語で書いてあるの」

このブルベリ国の公用語は、フロウ語だ。

「ヒナंगाバ語が読めるの？」

「そうよ。と言うか、私は大体の有名な言語なら、読めるわよ」

メロンは、はひ、とか良く分からない声を出して、背もたれに体を預けた。

そのままの格好で、空を眺めている。私も空を見てみた。

ランが男の子達と追いかけてこをしている声が聞こえる。

「ねえサザンカさん」

「何」

「人間の心って、どうすれば理解ができるのかな」

彼の顔を見る。

目を瞑って体を反らし、頭は地面を向いていた。

「人間の心を、理解したいの？」

彼は体を元に戻して、私を真直ぐに見詰めた。

「そう、知りたい。誰がどう思っているか、あるいは、僕がどう思っているか」

理解は出来た。彼が何を言いたいのか。ただ、一つ気になった。

「貴方がどう思っているか？」

「そう。僕が、あるいは自分は自分が、自分自身が、どう思っているのか。」

それをね」

彼は噴水を見る。

「心を分かつたつもりでいる。相手も、自分もね。僕はどうしてもそんな人の事が理解できないんだ」

「何で、それを私に？」

「それは、僕も分からない。ただ一つ言えるのは、僕はサザンカさんの事をただの通行人のようには考えていない、だろう、という事だ」

「だろう、か。それは、不確定、それとも未確認？」

「両方だ。僕が、ただそういう風に勝手に解釈をしているだけかもしれない」

「馬鹿と天才、紙一重。恋と嫉妬も紙一重」

「そういう事だ。何も、僕には分からないんだ」

ランは戻って来そうに無い。

「貴方が考えている事は分かるわ。でも、貴方はそれを分かっている」

メロンは顔をこちらに向けた。

「貴方は、自分の心が分からないと言った。でも、それならば何で貴方は自分の心が分からない、という風に考えている事を口にできるの？」

「それは」

彼は言葉に詰まる。

「それに、自分の本当の心が分からなくても、自分の心だろうと考えるものは有るわけよね」

沈黙を肯定と受け取る。

「私には、貴方の心が今どんな事を考えているのかは分からない。でも、それを想像する事が出来るのよ。想像って、何だと思う？」

急な質問に、彼は戸惑ったようだったが、しっかりとした口調で答える。

「想像って、頭の中で色々考える事」

「まあ、ある程度、正解。でもね、相手の気持ちがあるいは心、ある程度、理解できないと、想像はできないと思わない？」

返事は無かったが、そのまま続ける。

「つまり、考えるっていう事は、相手の気持ちを理解するっていう事なのよ」

単純な三段論法になってしまったが、彼はこれで充分だろう。

そもそも、理解できるあるいはできないという議論の内容を、理解できると思えない。

彼は立ち上がり別れの挨拶をすると、とぼとぼと広場から出て行った。

彼は、本当は何をしたかったのだろうか。

その後は、ランに言わせれば平和な時間だった。

一人でのんびりとベンチに座り、ランが男の子達と遊んでいる様を見る。

いつの間にかランを中心に円ができていて、その中心にいるランはリュートを弾きながら歌を歌っている。

それならば、と私もランの隣に行き、皆と一緒に歌を歌った。

30：大道芸

いつの間にか、私達の周りは人で一杯になっていた。

子供からお年寄りまで、まさに老若男女。所々獣人や魔物の姿も見える。

そんな中で歌っていたが、四曲ほど歌い終わるとさすがに飽きてきたのか、前の方に座っている子供達が騒ぎ始めた。

「ねえ、他に何かやってよ」

私は、苦笑をしながらサザンカを見る。彼女も私と似たような顔をしていた。

「しょうがないな。お姉ちゃん達が、不思議なことを見せてあげよう。どなたか、半ロート硬貨を貸して頂けませんでしょうか」

そうサザンカが言うと、群衆の中から一人の黄色い髪の少女が、前に出てきて貸してくれた。

「有難うございます。折角だから、しばらく近くに立っててくれるかな？」

その少女は、言われた通りサザンカの隣に立つ。

「お名前を教えてもらってもよろしいでしょうか？」

「あ、はい。わたしはの名前は、タンポポ」

「有難うございます、タンポポちゃん。それでは、早速始めましょうか。不思議なショーの始まり始まり」

サザンカが見せたのは、硬貨が手の中で消えたり出てきたりするものだった。

横から見ていた私ですら、どうやっているのかは分からなかった。いつの間にか演技は終わっていたらしく、なぜか私に視線が集中していた。

「ラン、何かやってほしいんだって」

「何かって？」

「大道芸」

分かりきった事だったが、私に何が出来るだろう。
せいぜい楽器を演奏する事位だが、それはもうやっちゃってしまっ
た。

あと残ったのは、術か。

と言つても、上手く誤魔化せなければならぬ。

「それじゃあ、ラン、これでダンシング・ケーン、出来るよね」

サザンカは、どこから取り出した杖を私に渡す。今のはアピア
リングケーンという手品だろう。

ダンシング・ケーンとは。杖、あるいはケーンを空中浮遊させた
状態で自由自在に動かす。

勿論、手品の場合はタネがあるのだが、これから私がやろうとし
ているのはタネが無い。術を使えば簡単な事だ。

「うん。分かった。それじゃあ、私の手品も、見てください」

手品ではないのだが、あまり術の事は一般に知られたくない。

サザンカによると、魔女狩りが四百年程前から大体二百年間起こ
っていたのだ。歴史は繰り返される。

31：蒲公英

子供達の要望に答えているうちに、いつの間にか夕方になっていった。

人だかりは自然と消えていき、残ったのは私たち三人になった。

「ねえ、お姉ちゃんたちは、どこから来たの？」

この少女、タンポポは母親が迎えに来るまでここに残るようだった。

「えつとね、フロウ国のボタン、っていう町よ」

サザンカが答える。

「それでそれで、ランお姉ちゃんは、あんな凄い手品、どうやったの？」

「それは、秘密ですよ」

「教えてよー」

腕を掴まれ、左右に振られる。

サザンカが何かを言う前に、私がこう言った。

「それじゃあ、ヒントだけね。この水面を見ててごらん」

噴水の池の水面を指で指す。

タンポポちゃんは階段状になっている側面を二段ほど上り、中を覗き込んだ。

私は精神を集中させる。

頭の中の想像を鮮明にさせ、その通りに動かす。

「なんか出てきたよ！」

その言葉を聞きながら続ける。

今やっているのは、この前、川を渡る時にできなかったもの。

「水のボール？」

球状に丸めた水を持ち上げる。

感覚で全体が水面から上がったことが分かる。大体大きさは15ミリピンチ。

その水の球を手元まで持ってくる。

意外と、難なくできた。

「凄いね、お姉ちゃん」

元の位置に腰掛けたタンポポが言った。

水の球は、私の両手から少し浮いた状態で止まる。表面が波打っていた。

「私ね、昔からこういう事ができるの」

「魔法みたいだね」

「そう、だね」

まさに、魔法、なのだろう。

物を動かすという事が魔法なのか、という疑問、あるいは拒絶があったが、今こうしているとどこことなくレイアさんと自分がかぶる。急にタンポポが立ち上がった。

「あっ、お母さんだ」

そう言つて階段を下り、こっちを向いてお辞儀をすると、向こうに駆けて行った。

お母さんと思われる人物が、タンポポと少し話した後、こちらに向かつてお辞儀をしてくれた。

こちらも礼をする。

二人の親子は、広場から消えて行った。

「ラン、まだ大丈夫なの？」

何のことか分からずに、サザンカのほうを見る。

「いや、この前は水の球を作つても、できなかつたでしょ。でも、今はそんなに長い間作ってるし、他の事に気をそらしても大丈夫みたいだったし」

「あ、その事」

その事なら、今分かった。私のこの術は、レイアさんの魔法と、全く同じもの。この感覚は、そのはずだ。

「うん、何か結構強くなってきたみたい」

でも、その事は言わないでおこう。レイアさんと同じだとしても、

もし違っていたとしても、大差は無いのだから。
水の球は、そっと池に戻しておいた。

32：夕食

僕とシロツメさんがラン達と合流をすると、早速ランが僕に耳打ちをしてきた。身長差のせいでランが背伸びをしても耳まで届かなかったが、僕が中腰になってやっと届いた

「ねえラベンダ、私ね、水の球が作れるようになったの。それも、簡単に」

ランの嬉しそうな顔を見て、自然と笑みがこぼれる。

「よかったね。これで一步、成長したわけだ」

そう言って、緑色の髪の毛をぐしゃぐしゃしてあげた。

目が細くなつて、より嬉しくなったのだということが分かる。

「まあ、まだ先は長い。ゆっくり付き合っていけばいいよ」

「うん」

まるで子猫のような顔で素直に頷くラン。

サザンカと並んでいると感じなかった事だが、こうやってよくよく見ると可愛かった。

にっこりと微笑んだランは、服と髪をたなびかせながらサザンカの元へ走っていった。

そのまま歩き、董さんと大犬さんのやっている露店に行く。

近くまで行くと、周りの喧騒に負けず劣らずの董さんの声が聞こえてきた。

宿に泊まり、出発は明日という事になった。

宿の一階にある食堂で夕食を食べている時だった。

「ところで、シロツメさんとラベンダはどこに行っていたの？」
ラベンダが聞いてくる。

「んああ、ちょっと色々あってな」

「色々？」

「そう、色々だ」

「どんな事なの？ 少しでも興味があるのよ」

シロツメさんをチラッと見る。

いつもの無表情のまま、こくりと頷いた。

視線を戻す。

「それじゃあ、話すか。ちょっと長くなるかもしれないが」

そう前置きをして、今日あった出来事を話し始めた。

33：窃盗団、かな

僕達が歩いていると、悲鳴が聞こえた、気がした。

「シロツメさん、今の」

「路地の奥からだろう」

僕はそれを聞いて駆け出す。

人混みを抜け、声が聞こえた路地に入る。人通りが無く、薄暗かった。

左に一回、右に一回と曲がると六人の人相の悪そうな男に取り囲まれた女性がいた。

足音に気付いたのか、男の一人が振り向く。

「何だ、お前？」

その声に、他の五人も振り返る。

「言う必要は無いと思うが。それよりも、その子は嫌がっているように見えるが？」

シロツメさんが強い言葉で言う。

「そうあんたには見えるか、え？ でもな、こいつは、喜んでるよ」

そう言いながら、リーダーであろうその男は女性の後ろに回り、首に腕を回す。

女性は男が触れた瞬間びくりとなって、目を閉じてしまう。

「僕には嫌がつているようにしか、見えないね、この下衆どもが」
強気でいかないと行けない。というか、こいつら相手に弱気になる事は無いだろうが。

「なっに」。子供のくせして、生意気なんだっよ」

言葉が終わると共にこっちに殴りかかってくる。

僕はそれを難なく交わして、背中に肘を叩きつける。

それだけで、その男はうつ伏せに倒れた。

「何だ。こんなに弱いのなら、剣なんて使う必要もないね」

嫌味たっぷりにそう言うと、リーダーを除いた残る四人が一斉に襲い掛かってきた。僕だけに。

シロツメさんは足音も立てずにリーダーの後ろに回りこんでいる。僕は最初に掛かってきた男に近づいて、鳩尾を思いっきり殴る。そいつは倒れ、そして僕は一旦距離を取った。

実は、人間相手の喧嘩は久し振りだ。カブリサとやり合ってから十日以上経っている。

さつきは挑発するような事を言ったが、実は焦っている事も確かだ。殺してはいけない、と。

一人が歩いて寄って来た。視界には二人いる。

考えている間に後ろに回り込まれたようだ。

意識を集中させ、後ろへゆっくりと歩く。

前から来る男は僕とほとんど同じ速さで歩いている。

あと三步後ろに一人の気配がある。

あと二歩。

一歩。

そこで急に姿勢を低くし、後ろの男に回し蹴りをくらわせる。

二の足に当たり、男はさつきから倒れていた男の上に倒れこんだ。そいつが起き上がる前に、前の二人に駆け寄る。

前衛の拳骨を体勢を低くしてかわし、そいつを右側に突き飛ばす。そしてその後ろにいたやつを下から殴り上げ、倒す。

突き飛ばされたのは警戒したようで、僕から少し離れた位置にいた。後ろにいた男も一緒だ。

ちらとシロツメさんを見ると、リーダーは伸されていて女性は助け起こされている。

そこで、僕は逃げた。

「おい、こら、待て」

「待てと違って待つ奴が、どこにいるんだ」

そう言い合いながら、二人の男が追ってくるのを確認して大通りまで出る。

そこで人込みに紛れた。

意外と短絡的で助かった。追ってこなかったら逆に不味い状況になっていたかもしれない。僕も短絡的だったと反省する。

少し歩いた後、さっきの路地に戻り、中を進む。

そして、さっきの場所にそのまま倒れている四人と、シロツメさん、それにシロツメさんに支えられた女性がいた。

「流石ですね、ラベンダ。一人で四人を相手にするとは」
シロツメさんが誉めてくれる。

「いや、シロツメさんも気配も無く後ろに回り込めるなんて、凄いですよ」

「あ、あの、有難うございます、助けていただいて」

僕が言い終わった途端、溜めていたであろう言葉を一気に言った。

「いえいえ、偶然ですよ。とにかくここを出ましよう」

僕がそう言っただけで後ろを向き大通りに戻ろうとすると、女性が声を上げた。

「あの、反対側のほうが、私の家が近いですし、それに、お礼も」
シロツメさんの方をもう一度向く。

「折角の事ですから、ありがたくそうさせてもらいましょう、ラベンダ」

僕は頷いた。

「へー。そんな事があったんだ。それで、お礼は？」

そこまで聞き終わって、そう聞いてみた。

夕食はもう食べ終わっている。

「家に招待してくれて、紅茶とケーキを食べた」

「良いなー。私も食べたかった」

「ケーキは高級品だ。私は一度も食べた事が無い。

「それで、その人の名前は？」

「サザンカが大切な事を聞くと、ラベンダはうるたえた。

「え、えっと、シロツメさん。何でしたっけ？」

「私は聞く必要が無いと思ったので聞きませんでした。向こうも聞いてきませんでしたから」

そこで話は終わったようだった。

「ところで、ラン」

「はいっ」

急にサザンカから私の名前が出てきてびっくりする。

「驚かなくても良いですよ。それよりも、夕方、水の球を作った時、余裕があるって言ってたわよね」

「うん」

「それじゃあ、水で立方体は作れる？」

「やってみる」

コップに残っていた水に想像を送る。一辺が5ミリピンチ弱のさいころ。

その想像は、難なく目の前に現れた。

「凄い。これができたなら、次の段階に行けそうね」

「段階？」

私は水のさいころをそのままにしたまま聞いた。

「そう。私ね、ランの術をいくつかの段階に分けてみたの。それで、

次の段階は風よ」

「風」

「そう、風。空気を動かすの。ここは室内だから外に出た時にやればいいと思うけど、ランなら出来るはずよ」

確信した声でそう言った。

「ちよつと良いかい。これからの事なだけだよ」

董さんが突然言う。

「気になる噂を一つ聞いたんだが。あたい達の仲間の旅商人にな、ランちゃんがる術と良く似たのを起こせるっつー人がいる、っつー話を聞いたって奴がいてな」

「本当ですか？」

「まあまあ、落ち着け。言っておくが、信憑性は低いんだ。参考までに、話とこうと思っただに、参考までに、だ」

私と、同じ術を使える人。

会ってみたいような気がする。

「私、行きます。どこにいるんですか、その人」

「ケルプらしいんだ。ブルベリじゃあ、最北の港町になる。ここから近い。半日足らずで着くぞ」

「皆、行っても良いよね」

それぞれ、頷いてくれる。

「董さんと大犬さんは？」

「あたい達は別に急いでるって訳でもねえし、旅は道連れ世は情けつてんで、付いてく事にするよ、な大犬」

「うむ」

「有難うございます」

こうして、私はその人に会いに行くことになった。

35：夢

闇。

一面の闇。

いや、この表現は可笑しいかもしれない。

辺り一体が闇に包まれている。

声が聞こえる。

人の声か。獣の声か。

そもそも、声、と言つべきか。

言葉では無い。

音。

騒音。

轟音。

それが聞こえる。

金属の触れ合う音。

絶間無い音。

大量の足音。

火の手が上がっている気がする。

これは夢だ。

夢だから、分かる。

知らない事を、知っている。

大勢の人と獣。

戦争。

闘争。

大戦。

人と魔物。

人对魔物。

カレー戦争？

いや、場所が違う。

ここは、何処？
海が近くにある。
島、では無い。
大きな。
半島。
人が、
獣が、
沢山、
死ぬ。
私は何処。
私の夢。
私が居る筈。
何処？
何処、なの？
皆は？
何時？
誰？
如何して？
如何すれば？
終わりは？
終るの？
厭。
嫌だよ。
否。
仕方が、無い。
のかな。
夢は、夢。
起こら無いよ、ね。
うつん。
私に、関係が有る。

私が見ているのだから。

正夢は、今迄見た事は無い。

あれ。

あれ。

あれ、あれ、あれ。

今の。

サザン力か、な。

何で見えたの。

真暗。

右から、左へ。

サザン力が走って行った。

何だろう。

何だったんだろう。

サザン力と戦争？

？

??

???

何で？

戦争が起こるの？

あのサザン力は、今位の感じ。

ここ数年？

もう、直ぐ。

もう直。

もう。

足り無い。

何が？

私？

私は、一人だよ。

でも、私が足り無い。

事実。

何が？

私の、何が？

消えた。

全てが。

36：朝

・・・ラン・・・

あれ、やっぱりサザンカ、いたんだ。

朝だよ。

え、朝？

「起きて」

「はい！」

キビツとそう言つと、笑い声が聞こえてきた。

「別に怒っている訳じゃあないよ」

笑っているサザンカを睨みつける。

いつの間にか夢の事は忘れていて、いつも通りの日常が始まった。

ラフレシアを出て、四時間歩いて着いた所はケルプだ。

斜面上に建てられた町に陸側から入ると、町全体が、そしてテユ

ーダ海が見渡せる。

家々の間を縫う道には、ラフレシアほどではないが、それでも沢山の人がいて、露店がある。

このどこかにいるのだろう。私と似たような術を使える人が。

「まずは、宿から探した方がいいかもな」

ラベンダがぼそりと言う。

「そんだったら、良い宿が有るぜ。この道を真直ぐ行って、商会んとこを左に曲がった『フモレスケン』っつー小ぢんまりしたとこだ。安いし、何よりその主人と俺は知り合いだからな」

大犬さんの意見に賛成して、その宿に向かう事にした。

途中で董さんが途中、商会である噂のことを聞きに行くために抜けた。

そこで曲がると極端に人通りが少なくなるが、道はしっかりと舗

装されていて暗い雰囲気ではない。

しばらく行くと、他とは違い木造でできた三階建ての家が見えてきた。

「あの木造家屋がそうだ」

近くまで来ると、確かに『Humoresken』フモレスケンという看板が扉の上に取り付けられていた。フモレスケンは確かエーデル語だっただろうか。

正面には扉が二枚あり、それが左右に動く事で中に入れるようになっていた。

中に入ると石畳の部分があり、一段高くなった所は木の床だった。そしてそこには見たことも無い綺麗な服を着た女性が立っていた。「ようこそお越しくださいました。私、女将の櫻と申します」

その女性がそう言うと、大犬さんが中に入って言った。

「¥、S=&。*、X>き」

「—Q+<||&\$% #) - @。RZ々 &\$ハ・*¥ @?」

「#/、0\$##"。く%へ、>¢ *ゞ…、た」

言葉が理解できなかった。

「よう、櫻さん。久し振りに来たぜ」

「あら大犬さんではないですか。主人を呼んできましょつか？」

「いや、後でいいさ。今は部屋のほうに案内してくれ」

いきなりナデシ語で話されたものだから、私ですら理解するのに数秒を要した。ランに至っては理解すらできていないだろう。

「では、こちらへどうぞ」

女将の櫻さんはフロウ語でそう言うと、私たち中に招き入れた。

靴を脱ぐように言われ、そうしてから木張りの床に上がり、二階に上がった。

二階には部屋が二つあって、男女が別れて泊まる事になった。

私とランが入った部屋はナデシ国の雰囲気が溢れるいわゆる和室という部屋だ。多分、シロツメさんたちが入った所も似たような造りになっているのだろう。

およそ33000平方ミリピンチ、つまり十畳ほどの広さで、奥の窓からはテューダ海が一望できる。

「靴、履かないと変な感じ」

基本的にこの辺り西北地域では寝る時以外は靴を脱がないため、違和感が出るのは当然の事だと思った。

「ねえ、ランの術を使える人の事は董さん達に任せておいた方が良いわよね」

私の質問に頷いて答えるラン。

「それなら術の練習でもしてみたら？」

こう提案してみたのだが、首をかしげてランはこう答えた。

「ここに来る間も何度か風を起こそうと試してみたんだけど、何と無く掴み所が無い感じがして、うまくいかないの」

「それは？」

「うーん、何て言うんだらう。扉を開けようとしたら先に開けられ

ちやつて、体勢を崩しそうになる感じ、かな」

「そう」

それは、分子の v の二乗の総和は0になるが、 v バーの二乗の総和は0にならないという事だろうか。

全体的に動かそうとするとランの力は分散されてほんの僅かしか効果が得られないのだろう。逆に局所的に動かそうとすると操作が難しいのかもしれない。

だが、局所的に動かせないと次の段階に行くのは難しいだろう。

「それならね、まずは一つの分子だけを動かすことに集中して」

これが無理難題であることは重々承知している。

だが、これができるに越した事は無いのだ。

部屋に入った僕達三人は、これからしばらくここに留まる事で見が一致した。

たとえランと同じような術を使える人がいなかったとしても、このまま旅を続けるよりは一旦ここで情報収集を行った方がいいという考えだ。

勿論、これは積極的意見ではなく消極的だ。駄目と言われたら無効になる。

そこへ誰かが部屋の中に入って来た。

「失礼致します」

そう言っただけ現れたのは櫻さんではなく、僕がよく見知った顔だった。

「ライム？」

そう言われたほうは顔を僕に向けて、目を見開いた。

「ラベンダ、かじゃ」

頷くと正座をしたまま寄ってきて、僕は顔を撫でられる。

「おっひさっしぶりー。もう何年ぶりになるのかな」

「三年だ」

「そうだったね」

「それより、何でライムがここに」

僕が最後まで言い終わる前に、大犬さんが割って入ってきた。

「ちよつと待ってくれ。俺の思考が付いていけないんだ。ラベンダって、あのラベンダ・フロウ第一王子だよな」

僕は頷く。

「んで、ライムって、あのライム・ブルベル第一王女だよな」

ライムは頷く。

大犬さんは頭をわしゃわしゃと掻き筆り、訳が分からないといった表情で続ける。

「何で、第一王子と第一王女が、こんなぼろ旅館に揃うんだよ！」

「この旅館のどろがぼろ旅館じゃ、このバカ大犬！」

急に顎鬚をたっぷりと蓄えた男の人が、部屋に入ってきた。

「おつ、杉じい、久し振りだな」

大犬さんは立ち上がり、杉じいと向かい合う。

「その呼名は止めんかい、バカ大犬。ワシはまだ四十路もいっつらんわい」

あの顔で三十代とは驚きだ。

「杉じいもその呼び方は止めてくれよな。もう俺はバカじゃ無いんだからよ」

「まあよい、久し振りだからのう。また今晚会おうではないか。失礼したな。さらばじゃ」

扉が閉められ、杉さんの姿が見えなくなり、大犬さんが杉さんについて説明を簡単にした。

「あの杉じいはこの主人で、櫻さんの旦那だ」

するとシロツメさんは話す機会を窺っていたような風で話し出した。

「人は見かけによらないものですね。所で、さっきの事なのですけれど」

大犬さんが元の場所に座る。

「あくまで仮説ですが、私たちがここにこうして集まったのは、偶然ではないと思うのです。ラベンダ、ランとサザンカを呼んできてくれますか。ライム王女もここにいてください」

「あ、はい」

僕は立ち上がり、隣の部屋にいる二人を呼びに行った。

丁度董さんも帰ってきて、七人が集まった。

全員がシロツメさんだこれから話すことに耳を傾ける。

「まずこれが仕組まれた事ではないか、と始めに疑問に感じたのは、海の側のログハウスでラベンダと話した時でした。あの時ラベンダは、王宮に魔法使いの噂が流れていると言いました。ですが、そのこと自体がおかしいのです。もし、王宮にまで流れる噂があるとすれば、ボタンからこのケルプまでの間にその噂を聞いてもおかしくは無かったはず。というより、どこかで聞いていたはずです。ところが噂は広がっていなかった。つまり、魔法使いの噂は王宮の内部しか広まっていなかった事になります」

「ちよつとまつて。それだと、まるでわざとラベンダをランに近づけた事になるんじゃない」

「確かにそういう風に捉える事が出来ますね。まあそれは憶測です。疑問に感じたもう一つの理由が、そこにいるライム王女が存在。私たち“四人”は、このライム王女に会うように仕組まれていたとすれば、まあある程度は納得が出来ます。董さんと大犬さんが王宮から雇われているとすれば」

「ちよつといいかい。まあ、確かにあたい達は王宮から雇われてラベンダ王子と一緒にいたが、それは別の理由だ。あたい達は王子の婚約者探しを手伝ってほしい、って頼まれたんだ。別にわざとここに連れてきた訳じゃあない」

「それならば、可能性が二つある。一つはライム王女との結婚。もう一つはランとの結婚。ただ、後者の方が有り得るだろう」

「「ちよつと、結婚って何で」」

ランとラベンダの声がかぶるが、シロツメさんは続ける。

「これはあくまで動機を無視した上での仮説です。ですので私には分かりません。ところで董さん、商会の方はどうでしたか」

董さんは無言で首を振る。

「そうでしたか」

「ちよつと、私を無視しないで話を進めないでよ」

ライムがそう叫ぶ。

「そうでした。仮にも一国の王女様。なぜこんな所に？」

「ふん、聞くのが遅いわよ。でもまあ、答えてあげるわ。それは」

そこで急に口が動かなくなるライム。

「それは？」

ランは堪らなくなり聞く。

「それは、えつとね」

さつきまでの威勢のよさはどこへやら、今は歯切れが悪く口籠もっている。

「家出、だろ」

ラベンダがそう言うのに対し、ライムは顔を真っ赤に染めている。

「ライムは年に数回は家出をするらしい。ローズ女王が嘆いているじゃないのを聞いた事があるから、もしかしたら、と思つてね」

ライムは一層俯き、だが反対に口は膨らませて、内心ではラベンダに八つ当たりをしていた。

40：次の予定

ラベンダもライムも家出中だという事で、王族二人を除いた五人は、王族の子どもは家出が好きだという結論に達していた。

「所で、何でフロウ王がそのランと言ったか、と結婚させたがってるのかしら？」

ライムが誰にともなく、ラベンダを凝視しながら言う。

「僕は知りません」

ラベンダはシロツメさんを見る。

「多分、ランの術が欲しかったのでしよう。彼女を放っておくと困ると思っただけでは？」

「何、術って」

ライムがランを見て聞く。

「それは・・・」

ランはサザンカに助けを求めるような眼差しを送った。

「それは、物体を遠隔的に動かすことのできる力の事です。簡単に言うと、魔法という概念とよく似ています」

「魔法！」

ライムは立ち上がった。

ラベンダが彼女を驚いた目で見詰めた。

「ライム、どうしたの。驚くなんて珍しな」

「いえいえ、驚いてなど。それよりも。いいえ、今すぐに、私と王都ファイオレに来てください」

ライムは真剣な眼差しでランを見詰めた。

「えっ。でもでも、何で、です、か。家出、中？」

「そんな事はどうでもいいでしょ。兎に角、私と共に、王都まで来ますね」

その剣幕に押され、ランは頷いていた。

「それでは、昼食後、出発します」

そう言い置いて、ライムは部屋を出て行った。

残された六人は顔を見合わせる。

「良かったの、か？」

「悪いようにはならないと思う、けど」

「ここにいる理由ももうねーし、良いんじゃないか」

「杉じいには悪いーが、そうするか」

「特に問題は無いでしょう」

「いったい何だったの？」

とラベンダ、サザンカ、薫、大犬、シロツメ、ランは呟くのだ
た。

昼食を食べ終えた七人は、ライムに急かされるまま馬車に乗り込み、王都フィオレへと出発した。

ここケルプから王都まで、馬車だと順調にいったとして3日はかかる。

「なあライム、何で急に」

「ちよつとあんたは黙ってて。今、考え中なんだから」

ラベンダをあんた呼ばわりしたライムは、再び手を顎に当てて熟考を再開した。

董は荷物の中から薬草を取り出し、匂いを嗅いだり掻き混ぜたりしている。

大犬は持っている様々な武器の手入れをしている。

サザンカは難しそうなオダマキ語の小説を読んでいる。

シロツメは外を眺めながら、何事かを考えているようだ。

ランは目を閉じて集中していて、どうやら術の練習をしている。

ゴトゴトと揺れ動く馬車の中でほとんど会話がなされないまま、王都までの長い道程を進んでいく。

時折、サザンカがページを捲る音がするが、それはほんの一瞬の事。

「動いた！」

ランが突然声を上げた。だが、それに反応したのはなぜかラベンダだけだった。

「分子が動かせるようになったのか」

「うん。まあ、ほんの少しだけだったけど。でも、感覚が分かったから、後は簡単だと思う」

「頑張れよ」

「うん」

それっきり再び静かになった。

これから先、彼等に何が待っているのか、なんていうのは誰も知らないことで。

ただどもう運命の齒車は回り始めているからして、それを止める術^{すべ}を誰も知らない。

・ミッドローグ (Middlelogue) ・ (後書き)

ここで一章が終わり、です。

短いな。

しかも終わり方、いまいち判らないような気がするが、する。

しかもなんだか初期設定が上手く活かしきれていない感じがします。二章からはもうちょっとましな文章が書けたら良いな、と思っておりますが。

41：フィオレの王宮

馬車に揺られる事、三日。

海岸線を横目に見ながら移動した一行は、無事王都フィオレに到着した。

董さんと大犬さんとはここでお別れということだった。王宮には入らないで街でしばらく商売をして、五日後には予定通りヒナンガバ国に向けて出発するそうだ。

私達五人を乗せた馬車はそのまま街を進み、ついに王宮の入り口に到着した。

今は城壁に遮られて見えない王宮は、遠くから見た限りではとても大きくて立派だった。

そして馬車から降りた私達の前に立ち塞がる鉄の扉が、今ゆっくりと開かれていく。

そこから見える景色は言いようのない、ナデシ国のおとぎ話に出てくる竜宮城を再現したかのような、美しいものだった。

正面の真つ白なお城を中心に左右対称に植えられた色とりどりの花々は水々しく輝き、遠近法を駆使した庭園は只でさえ広い空間をより広く見せている。

所々に植えられた樹木は丁寧に剪定され、美しい女体や聖書の一場面を模しているようだった。

そして正面にそびえるお城は、白い石を基調として所々に赤や青、緑の石が詰めこんであり、どこか遊び心が感じられる。

あんな城壁で困ってしまうのは勿体無いと思った。それと、門からお城までが遠いとも。何で馬車で中に入らなかったのだろう。

それをサザンカに聞いてみると、首を傾げるサザンカに代わってライム王女が答えてくれた。

「私のお父様は、小心者なのよ。こんな綺麗な庭を作って国民の疲れを癒したい、なんて言うておいて、門の中に誰も入れようとしな

いの。馬車で中に入れないのもそのためよ。聞いた話だけど、先代は誰でも受け入れたせいで闇討ちにあったそうよ」

呆れ気味のライム王女。

王女様も大変なんだな。でも、私達を連れて何をするつもりなのだろう。わざわざ家出を止めてまでやるべき事なんだから、大事な事なのだろうか。

そう呑気に考えながら、私達はお城に入ってしまった。

41:フィオレの王宮(後書き)

ゆっくり更新していきます。

42：王との面会

馬車を降り、見上げるほどの大きな鉄扉がゆっくり開いていくのを眺めていると、ラベンダが話しかけてきた。

「ラン、そんなに緊張するな。フィオレ王は確かに小心者だが、お優しいお方だよ」

「う、うん」

私、そんなに緊張していたのかな。

そう思ったが、指がうまく動かない事に気付いて苦笑した。

扉の間から覗く王城内部は外壁と同じように白い石を基調としているみたいだった。

だんだんと中が見えるようになってくると、そこに大勢の人が整列して立っている事が分かった。

「おかえりなさいませ、ライム王女。いらっしやいませ、ラベンダ王子、シロツメ様、サザンカ様、ラン様」

と、その大勢の人は一系乱れずに言い、これまた一系乱れずに礼をした。

「ひえ〜」

そう、私は咳いてしまった。

「ライム、お帰り」

「お帰りなさい」

「ただ今戻りました、お父様、お母様」

そう言ったライムに続けて、ラベンダが前に出た。

「お久し振りです、フィオレ王、ローズ王女」

「久し振りだな、ラベンダ」

「お久し振りです、ラベンダ王子」

私はただただ固まっていた。

周りを取り囲む人人人。そして目の前に立つ三人の、否、四人の

王族。

固まっている私を余所に、サザンカとシロツメさんは自己紹介をした。

「お初にお目にかかります。私、ランとサザンカのお伴として参りました、シロツメと申します」

「初めまして、サザンカです」

王と女王の視線が私に移動し更に体が固まったのが分かった。

何か言葉を言おうと思ったが、喉がカラカラになったように声が出なかった。

「は、はじ、めまして。ラン、です」

何とかそれだけを言うと、王は笑顔で言った。

「まあ、今日は長旅と行き成りの対面で疲れただろう。城内に客室を用意しておいた。そこで休むといい」

「ありがとうございます」

シロツメさんはそう言って私の手を引き、サザンカと共にその場を下がっていった。

42：王との面会（後書き）

久しぶりの投稿。

待っていてくれた人は、お待たせしました。

少しずつでも更新していくつもりですので、
気長にお付き合いいただければ幸いです。

43：一つの予言

案内された客室は、それだけで家一つが収まってしまいうちに広がった。

絵本でしか見たことのないような家具の数々は、ここが天国であると錯覚してしまう程に綺麗だった。

しばらくそれらを眺めて、天蓋付きのベッドに跳び込んだのと、扉が開いたのは同時だった。

「ラン、持ってきたわ」

ベッドに体を沈めたまま扉を見ると、そこには本を一冊手に持ったサザンカがいた。

王との面会の後、サザンカは城内にある図書館に行っていたのだ。

「ここに、ライム王女がランの術の事で驚いた理由と、ケルプの噂の理由が書いてあったの」

「ホント！」

カバツと跳ね起きて、サザンカに駆け寄る。

「ええ」

そう言ったサザンカは、本を開いてある一文を指し示した。

『魔女現れる時、この世に厄災降り、また其は魔女に因り鎮められ、世は再び平静と成る』

夢で見た事とこの文が被る。

ラベンダとの出会いから始まったこの旅の先に待つものを垣間見て、私は言葉を失った。

「つまり、ランは過去にフィオレで予言されていた人っていう事で、ケルプで噂されていたのは本当はラン自身の事だったんじゃないかな」

サザンカの言葉は耳には入るものの、理解ができない。

「別の本には、そろそろ魔女が現れるって書いてあったから、それで噂が発生したのね」

「何で」

私は

「皆を巻き込むの？　ねえ、何で？」

サザンカの苦笑が私を苛立たせる。

「私が」

あの男の言うように

「魔女だから？」

ただ首を振るサザンカ。

「じゃあ、私が怪物だから？　異形だから？」

「違うよ、ラン」

そう言って抱きとめられた私は、サザンカの胸でしばらく泣いた。

44：開戦宣言

泣き疲れて眠ってしまったランを、そっとベッドに寝かせてあげる。

多分、長旅の疲れも溜まっていたのだろう。

顔を上げて窓から外を見ると、私がフラウにいた頃を思い出した。王立学院に通っていた時期に彼と一緒に学院内を探検して、研究施設のある学院の中でも一番高い塔に登った事がある。

その時の景色と似通っていて懐かしくもあり、また

「サザンカ、ラン、いるなら返事を」

突然扉の向こうからライム王女の声が聞こえた。

焦っているようなので急いで扉を開けると、さっきまで走っていたのか息を切らせていた。

ライム王女はチラリと部屋の中を見た。

「フロウ国が、ここフィオレに、開戦宣言を」

それだけを言って倒れてしまったライム王女をたまたま通りかかった使用人に任せ、急いでランを起こす。

「ラン、起きて！ 早くここから逃げるわよ！」

揺さぶっても中々起きる気配がなく、外からは人の駆け回る足音が響き、そのたびに緊張を高める。

と、一つの足音が止まり、大きな音を立てて扉が開かれた。

「ラン、サザンカ、無事か！」

そこから表れたのはラベンダだった。

私は頷くと、ラベンダは駆け寄ってくる。

「ランは」

「疲れて寝てるだけ」

「そっか」

ほっとしたのも束の間、開いていた扉から騎士のいでたちをした男が剣を構えて入ってきた。

「逃げるよ」

頷くと、ランをなんとかおびつて駆け出すラベンダについていく。騎士の男は私達に何をするでもなく、後ろからついてきた。多分味方だろう。

「シロツメさんは？」

「分からない」

ラベンダはそう言って首を小さく振ると、廊下を右に曲がった。

45：出奔

足音だけでサザンカが着いてきていることを確認しながら、人が走り回る城内を出口に向かって走る。

幸いなことに、突然のことで情報が錯綜しているのか、誰も僕たちを気にすることはなかった。

「ね、ねえ、一体どうなってるの？」

さすがにこの状況だから起きたのだろう、背負われているランが狼狽したように聞いてきた。

「さあ、僕には父上の考えてることなんて分からないからな。今はここから兎に角逃げよう。そうしないと、フロウにもブルベリにも迷惑がかかる」

「それってどういう」

「説明は後だ。今は城から出てフィオレの外まで行こう」

「うん」

小さな声だったので聞き取り難かったが、頷いてくれたことは分かった。

そうこうしているうちに城門までたどり着き、門番に出達するすることを伝えて外に出た。

更にしばらく走って街の外れの人気のない林の側まできて、そこで立ち止まった。

僕と騎士の人は息を切らせてはいないが、サザンカは違うようで座り込んでしまった。

ランは当たり前だが疲れていない。

「大変なことになったわね」

呼吸を調えたサザンカがこつちを見て言ってきた。

「ああ。シロツメさんもどこか別の所に行ったようだし」

「何なのかしら。色々、偶然が重なってる」

僕は頷いて、隣に立っている騎士の人を見た。

この人はブルベリ王から僕たちのことを守るように言われたらしい。

僕が見ていることに気付いたのか、騎士の人はその重そうな頭装備を脱いで、その整った顔を晒した。

「自己紹介が遅くなった。俺はブルベリ王より貴女方をお守りするよう仰せつかった元ブルベリ国軍総隊長のリユウ・キングスリッドだ。よろしくな」

手を差し出してきたので握手をしようと、横からサザンカが疑問を挟んだ。

「どうして、私たちを守ってくれるの？」

リユウ・キングスリッドは頭をガシガシと掻きむしると、面倒臭そうに笑いながら言った。

「あー何だ、王に守られて言われちまってよ。だからな、理由はよく知らん」

嘘を言っているようには見えないが、元とはいえ総隊長だった男だ。

警戒するに越したことはないだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5237e/>

夕べの祈りより「四季」

2010年10月8日13時46分発行